
Twinkle, Tremble, Tinseltown

セールス・マン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T w i n k l e , T r e m b l e , T i n s e l t o w n

【Nコード】

N 2 0 6 0 Y

【作者名】

セールス・マン

【あらすじ】

アメリカのどこかにある都市、ティンゼルタウン。夏は暑くて冬は寒い、そして犯罪発生率は州屈指。ここで生きるには少しの冷徹さと多くの知恵、ついでに無限の度胸が必要だ。セックスとバイオレンスに彩られた街で繰り広げられる悪党たちの活躍を描くハードボイルド短編集。

登場人物紹介

ティンゼルタウンで蠢く人々について（掲載順、随時追加）名前、紹介、主要人物として登場した話の順です。作者の覚書とも言います。

フェルナン

スピアーズに雇われた運転手兼使用人。

・ Igor's alive

クリスタ

どんな要望にも応えるプロの娼婦。

・ pimp taxi route 1

・ swim near the bottom

ギャッジ

女しか乗せないタクシー運転手。

・ pimp taxi シリーズ

スリム

金次第で誰とでも組む狙撃手。

・ The maverick , The proud

・ from dusk

リー

医療刑務所に収監された青年。

・ i f

ダリル

人を殺さない探偵。

・ m e e t G r o l l i a

ジョイス

罰当たりな尼僧。

・ m e e t G r o l l i a

ソロ

軽薄なイエロー・ジャーナリスト。

・ T a m e d S t a l l i o n

ブランチ

大人しい令嬢。

・ T a m e d S t a l l i o n

ラビー

熟練の裏社会の人間。

・ I g o r ' s a l i v e

・ s w i m n e a r t h e b o t t o m

レス

俳優を父に持つトラック運転手。

・ swim near the bottom
・ want wipe down under overlap

ドクター・キルケア

堕胎手術で荒稼ぎする医師。

・ want wipe down under overlap
・ till dawn

フロリー

被虐的趣味のあるストリッパー

・ from dusk
・ till dawn
・ November morning

以下随時掲載、加筆。

Igor's alive

ミスター・スピアーズがまた新しい男めかけを連れてきたらしい。ティンゼルタウンの上流階級はおるか、通いで来ている家政婦の口から相当な下々の者まで噂が伝わるのに、一週間と掛からなかった。

もつとも噂はあくまで噂。そもそもこの街で検事なんて職業は憎悪半分、畏怖半分の眼で見られるのは当たり前だし、彼の犯罪者に対する容赦ないお仕置きは世間に広く知れ渡っている。脛に傷ある連中や資金集めパーティーの招待状を受け取れなかった有閑マダムは、くだらない風評へ涎を垂らして飛びついたに違いない。材料は揃っていた。ミスター・スピアーズは20年ほど前に結婚した妻をたった半年で追い出して以来独り身を貫いていたし、かといって浮いた話は皆無。料理を作りに来るミセス・カーシュを除いて家で使うのも男ばかりで、それも入れ替わり立ち代りやってくる彼らの特徴がどれも似たり寄ったりときては。

今回運転手とプライベートな身边警固のために雇われたフェルナも、世間が推測する「採用条件」にぴたりと当てはまる男だった。白人、ジョン・ウエインばりの逞しい体躯、端正な顔立ち、余計なお喋りはなし。そしてブロードではない。脚立に跨ってニワトコの枝に鉄を入れている姿などノーマン・ロックウエルの描く絵にでも出てきそうな風情があり、声を掛けてみたいと思う女性がいても不思議ではなかった。実際幾人が当たり障りのない会話を交わすことに成功しているし、もうしばらくは挑戦者も後を経たないだろう。

迷惑なのは疑いを掛けられた当の本人で、と言いたいところだが、

実際のところ彼の本心はわからない。いくら下世話で勇氣ある人間でも面と向かつて正体を聞くことは出来ず、かといって彼の経歴を知っている者もないので勝手な物語は妄想以上に膨らまない。街の外のガソリンスタンドで目をつけられた、いやもともと海兵隊員だった、などと勝手に話が作られても、本人はどこ吹く風。訊ねられたら答えるのだらう。しかし誰も聞き出さずにいた。

結局のところ怖がりな小市民が気にするのは彼が良い人間か悪い人間かという二択問題に尽き、その点に関して言えば、どうやら悪い人間ではなさそうだという意見が大多数を占めるのにそれほどの時間は掛からなかった。口数こそ少ないものの、フェルナンはその態度で自らの性質をちゃんと表明することが出来たからだ。

窓ガラスを叩く指先は赤く、ガレージの外に据えつけられた照明を反射して硬質な輝きを放っていた。灰皿の中でもみ消された煙草が断末魔の紫煙を上げ、細く開いた窓の隙間から溢れ出す。それが髪に纏わりつくことなどお構い無しに、女はシャンパングラスを車内に差し入れた。彼が逆らわないことを知っていたのだらう。丸く結わえてピンを突き刺した茶色の髪の下、テグスで皺を伸ばした顔が艶やかな微笑を湛えている。

「差し入れよ」

強化ガラスが完全に降りたにも関わらず、フェルナンの表情はまだ読めないままだった。ただ礼儀に則って、明らかに酔っている口調の女へも律儀にどうも、と返す。渡されたペリエへ口を付けていないにも関わらず、彼の声は低く心地よくしゃがれていた。

「パーティーは？」

「退屈したらありゃしない！ もっとも今回の目的は、ルヌヴィエ・ドウ・ラ・ソミュール伯爵夫人への謁見ですけどね。それにしたつ

て」

摘まんで掲げた自らのシャルドネをごくりと飲み、綺麗に描かれた眉を吊り上げる。

「あら、これはお家の特産品じゃなくてシャブリなの」

幾台かのリムジンが押し込められた駐車場は、二人以外の人影が見えない。このご時勢に個人契約の運転手を抱える者など稀だし、その貴重な数人も下層階級用に用意された晚餐を平らげに邸宅の台所へ集っている。主人の悪口や噂話が飛び交う社交場へ新しい仲間が減多に脚を運ばないということは、謎が謎を呼ぶ一つのきっかけになっていた。女もそれを聞きつけ、当て込んで来たに違いない。庇のおかげで薄暗い建物の中、胸元につけたダイヤと同じくらい藍色の両目が輝いている。アルコールのせいではないだろう。高い酒は酔うためにあるのではないのだ。

緋色のドレスを地面に引きずることなど全くお構い無しで、女は磨き上げられた車体に寄りかかった。

「こんな良い男を車に閉じ込めとくなんて、グレッグもワルよねえ」
フェルナンは微笑んで、窮屈そうにシートへ埋めていた身を据えなおした。大きく開かれた胸の谷間を注視するわけでもなく、青灰色の瞳を失礼にならない程度の真剣さで女の口元に向けている。むしろ相手の体を遠慮会釈なくめまわしているのは女のほうだった。お仕着せのタキシードでは隠し切れぬ二の腕の筋肉は、ジムで個人トレーナーと一緒に設計する観賞用のものではない。緩い下目使いを維持したまま、女はわざとらしい吐息を零した。

「フェルナンって、どうかしら。フランスっぽいわね。それともスペイン？」

「カナダですよ」

押し出すような口調でフェルナンは答えた。

「当たらずしも遠からずってところ」

「ケベック？」

「Non, madame. Je suis de Vancouver.」

「すごい」

きやつきやつとまるで少女のような笑い声を上げ、女は手を叩いた。

「軽口も言えるのね」

でも、と少しだけ眉を顰めグラスを振った際、僅かに残っていたシャルドネが底で跳ねる。

「奥様はやめてちょうだい」

「では……ええ」

数秒動きを停止してから、男の丸い目が瞬く。そして言葉を飲み下した後にやってきたのは困惑とかすかな含羞だった。先ほどから男の顔つきは少しずつ、段階的にその柔らかさを増している。固まっていた表情筋が動き始めるにつれ、その面立ちが実はお澄ましなどに向いていないということが明らかになっていく。動物のように即物的な感情を表に出したとき、男は黙っている時の数倍魅力的だった。

「何と？」

柔和というよりは愚鈍に近い顔へ戸惑いを上乘せして、フェルナンは居心地悪そうに肩を揺らした。

「名前」

まるでその瞬間を待ち構えていたかのように、瞳の奥がきらりと光る。機械油の匂いが漂う空気の中で豊かな髪を揺らし、女はほんの僅かに顎を持ち上げた。

「そう、名前だね。堅苦しいのはいや」

身が屈められ、年を食ってもそれなりに美しい顔が同じ高さにまで降りてきたとき、フェルナンは片眉を吊り上げた。

「こう呼んで」

女の唇が窄められたのと、男の眼が再び感情を無表情の奥に隠し

てしまったのはほぼ同時のことだった。

放射状に飛び散った脳漿と筋組織を顔といわず胸といわず浴びた時、フェルナンの頭へ咄嗟に浮かんだのは、ああまた怒られる、という慣れきった怖れだった。発射音も掠めた357マグナムに切り裂かれた空気も確かに傍を通り抜けたのだろうがさっぱりわからない。ただトマトのように砕けた女の顔右半分で視界が潰れるのを引き継ぐよう、彼は目を強く閉じた。静寂に血塗れた肌の上を撫でられて、そのまま更に眉間に皺まで寄せる。このまま何も聞こえず、主人も車も自分自身も、世界に存在するありとあらゆるしがらみが全て消えてしまえばいい。心の底から思いながら、フェルナンは次に訪れる声を強張った体で待ち構えていた。

「バンクバーだって？」

彼が願っていたよりも早く、少し高い声が血の気の引いた耳朶に滑り込む。手探りで目元を拭い、ついでに右頬へくつついた大きな塊を指二本で摘まむ。ねばつく瞼をこじ開ければ、手の中で歪む女の目玉と視線が絡んだ。赤い蜘蛛の巣状の膜に覆われたそれは、先ほどの恐ろしい輝きなどどこへやら。ひしゃげて透明な液体を溢れさせ、血の涙を流しているかのようなだった。

のろのろと顔を持ち上げたフェルナンを待ち構えていたのは、掌にある瞳よりももっとぎらつく青い目だった。既に銃は引金を引いた手とともにコートのポケットへしまい込まれている。

「俺もケベックだと思ってたよ」

引き攣るような笑顔でも、彼にとっては本心からのものなのだ。ここまで汚れてしまえばもうクリーニングも糞もない。袖口で力任せに顔を擦ると、フェルナンは運転席のドアを開けた。崩れ落ちた

女の頭に扉がぶつかり、力任せに押しやる。無論、誰からも文句が返ってくることはなかった。

「グレッグは？」

「まだ会場に」

「顔繋ぎも大変だな」

ふんと鼻を鳴らした様子を静かに見遣り、フェルナンは脱ぎ捨てたジャケットを車の中に投げ入れた。

「お待ちになりますか」

「ああ……いや、いい。ドレスコードに引っかかる」

ジャケット代りに羽織った薄手のスプリングコートを一ひらめかせ、男は車の後部に回った。

「それにフランス料理は堅苦しくて性に合わない」

開いたトランクに骸を放り込むのはフェルナンの仕事だった。魂を失い肉体が重さを増しても苦にせず軽々と抱え上げ、引きずるドレスに躓くこともない。まるで荷物でも運んでいるかのように感情の籠らない動きを嘆くよう、垂れた女の首が左右に振れる。

「先週はどうだった」

乱雑に作ったスペースへ瘦せた体は収まるものの、長い裾ははみ出したままだった。丁寧に巻き取り屍の膝に挟み込んでから、男はフェルナンに向き直った。

「あいつ、喜んでたか」

「多分、恐らくは」

台本でも読んでいるような口調でフェルナンは言った。

「はつきりとは分かりませんが」

「冷たい奴だな」

ちよっぴり肩を疎めるのはやはりポーズだけで、その目元は穏やかに笑い皺を刻んでいた。

「社交だなんだって言って、本当にちゃんと出来てるのかね。生きた女一人相手に出来ないくせして」

人の頭を瞬きもせず撃ち抜く癖に、その口ぶりはあくまでも慈愛

に満ち満ちているのだ。これは恐らく、フェルナンの知らない遙か昔から何一つ変わりはないだろうし、これから先変わることもないのだろう。滔々と紡がれる悪行の羅列が耳の奥に溜まり、顔に張り付いた血肉が乾いて固まり始める。ぼうつとした意識の中、目だけで捉えていると、男の口から飛び出すものが世にも恐ろしき罪の詳細ではなく、何かもつと人の心を暖める、優しく美しい言葉であるような気がしてなくなってくる。

「そういえばミスター・スピアーズが」

自発的にか外的要因からか、鈍った脳から声が滴り落ちる。

「部屋に閉じこもられた後、しばらくして中から噉り泣きが」

「気にするな、毎度のことだ」

掻き消すように手を振り、男は苦笑した。

「結局のところ、意気地なしなのさ」

乱暴に閉じられたトランクの音で一瞬掻き消されたものの、ざわめきは確実にこちらへと近付いてくる。首を伸ばし、男は柔らかく目を細めた。

「もうお開きか」

これも買ひ与えられたロレックスは薄暗さのせいで見えないが、恐らくもうすぐにも日付が変わる。幸い車を回す使用人たちはまだ台所で燻っているらしい。指にくっついた肉片を剥がしているフェルナンに、男は自らの着ていたコートを押し付けた。

「顔だけは何とかしとけ。後は暗いから分かりやしないさ」

シャツだけだと思っていたのは勘違いで、男はコートの下にアルマーニのジャケットをちゃんと着込んでいた。ポケットには引き抜かれたネクタイまで突っ込んである。もしかしたら軽蔑は口先だけで、彼も会場に紛れて無銭飲食を楽しんでいたのかもしれない。短い付き合いだが、男のそうした俗物的なところをフェルナンはしっかりと見抜いていた。

「そつだ、グレッグに」

身を翻す前に、引金を引いた指がフェルナンの胸をさし示す

「お袋の病院を移すことは反対だつて言つていてくれ。あれ以上高いところに入れても、寝たきり老人には勿体無いつてな」

頷いたのを確認することもなく、男はのんびりとゲートに向かつて歩き出した。血は争えない。短い芝生の上でばかりと浮かんだ男の後姿は、確かにミスター・スピアーズのものとそっくりだった。今更ながら、今日の月が満月に近い巨大な白さを保つて空に浮かんでいたのだと知る。走った寒気に、フェルナンは丈の短いコートを強く握り締めた。

顔を洗つたり車のボディから血飛沫を拭き取つたりといった作業を終えたフェルナンが運転席へ戻つたのは、そろそろと雇い主を迎えに行く運転手たちがガレージに戻ってくる直前だった。暗がりの中を浮かれ歩く陽気な姿から見るに、もしかしたら一杯くらい引つ掛けてきたのかもしれない。声を掛けられたときは答えるものの、それ以外はいつも通り。シャツに飛んだ血を隠すようハンドルに覆いかぶさつて、しんねりむつつりと口を噤んでいた。

ミスター・スピアーズを拾つて帰宅したら、まずはトランクの中のを主寝室に運び込む。車を掃除し、恐らくどこかにめり込んでいるはずの銃弾をほじくり出さねばならない。七時きっかりに起き出すミスター・スピアーズがシャワーを浴びるために部屋を出た頃を見計らい、血まみれになったシャツで取り残された客を包んで庭の納屋に。置いてあるドラム缶の中身を庭のポインセチアに撒き、今度はシートと服を引き剥がした客を中に押し込んで石灰をかける鍵を閉めたら残りのものをゴミ袋に詰めて二つ向こうの通りにある集積所へ捨てにいく。それから後はもう、いつもどおり。セイヨウカリンの剪定をして、余計な噂を聞き流す。

それだけのことができる知能に見合う給料が、毎月雇用主からフェルナンに手渡されていた。

続々と灯り出したヘッドライトに、黒いハンドルを固く握り締め、指の関節が白く浮かび上がる。いつだったか、この手を女に褒められた事があったのをフェルナンは思い出した。指が長くて大きくて、体の割にはとても繊細な造りなのだという。そのときは少し納得したものの、今視線を落とせば太った五匹の蚕が無様に革へ巻き付いているだけにしか見えない。

指に限らず、日々体が昔の人間的なそれは優しく、鋼のような頑強さを持ち合わせていた。ものから、もっと違えばよぶよとした何かに変形していく事実には、フェルナンは慄いた。

それでもこの体を蛆から守るためには、出来ることをやらねばならない。今できることは何かと探る。

ミスター・スピアーズを無事に家まで連れ帰ることだと生存本能が選択し、フェルナンはイグニッションを回してのっぺりとした無表情に顔を戻した。

車内に充満した情事の匂いに、クリスタは露骨なほど眉を顰めて
みせた。もつともその広い眉間には、運転手の迂闊さへ侮蔑を感じ
るほどの高尚さは込められていない。彼女はいつでも本能に促され
て言葉を放ち、衝動に突き動かされるまま行動する。今もたんぱく
質と分泌液の匂いを素直に不快と認識し、代りに吐き出すバニラの
紫煙を覆い被せることで気分をごまかすつもりなのだろう。ものの
見事に失敗し、唇が左に歪む。

「なんてスベター！」

「あんたに言われちゃ世話ないね」

組み替えられた膝頭をバックミラー越しに見つめ、ギャッジはふ
つと息を吐き出した。直情過ぎる性格に眼を瞑れば、出るところは
出て締まるべきところはきっちり締まっているクリスタの肉体は素
晴らしい。強いてあげるなら膝の骨が大きいのは減点対象。すらり
と伸びた脚が、あつかましい出っ張りのおかげで若干蔽つく見える
多少がに股気味なのもあり、ハイスクール時代チアリーディングを
していたという事実が丸分かりになってしまふ。そのことも含め、
娼婦にすら一定の知能を求める最近の風潮は、彼女の威勢のよさを
どちらかと言えばアブノーマルな位置づけに追いやっていた。

「レイチエル？ リサ？ や、彼女はこんなハイスクールのガキン
チヨみたいなパフューム付けないよね。この匂い……」

通った鼻筋を軽く持ち上げ、ヘルズエンジェルスから追い剥ぎし
たようなレザージャケットの肩を抱く。

「カボティーヌ！」

「キャリーのだよ。文句言うならそっちに廻して」

女とまぐわい続けている最中も噛んでいたガムは、とつくの昔に
ブルーベリーの味を失っている。鋭い水音は自らの頬の裏側に菓子
がくっ付いたせいか、それとも後部座席のクリスタが鳴らした舌打

ちか。古びたイエローキャブのエンジンは余りにも大雑把で、ささやかな音は飲み込みまともに攪拌してしまう。

「ガキ同士で、お似合いか」

どうせなら下らない眩きも消してくればいいのに。自分がどのような態度を取っても彼女が子ども扱いすると分かっているのに、ギャツジは黙ってハンドルを切った。車は既に大通りを外れ、くねくねと路地に沿って従順に進んでいる。眠ることないネオンや街灯もここまでは届かず、住人が勝手に区切ったコンパネの塀がヘッドライトの単色を乱反射させるばかりだった。

そもそも本来、彼女とて人の生活にとやかく言えるような立場にはない。今夜呼び出された場所はアッパータウンにあるホテル・クレメンタイン。そこそこに良い客だったのだろう。チョコレートクッキーと同じ色をした髪を掻きあげるクリスタは、垂れ気味の瞼を満足げに細めていた。

「お腹すかない？」

「今何時だと思ってるのよ。太るじゃない」

「だって俺、夕食はいつも6時だから」

「あんた晩飯の時間なんて知ったこっちゃないわ」

まずいBBQソースの掛かったスペアリブは、四分の一と少しが経過した今、とつくに血となり肉となっている。不思議なことに、ハイスクールでフットボールを追いかけていた十年前に比べ彼の胃袋はその燃費を一層悪くしていた。いつもなら今頃は、ダンキンドーナツを買いにスミソニアン通りへと車を回している時間帯だ。鼻屑はゴマのついたもの。時折ホットチョコレートを飲んでいる巡回中の太った警察官に挨拶する。

クリスタがその手の人種を毛嫌いしていることは知っているので、ダイナーのスペシャルクラブサンドあたりで我慢してもいいかと思案していた時のことだった。後部座席から柔らかく尾を引く溜息が

流れてきたのは。

「やっぱりお腹空いたんだろ？」

「空いてないってば、馬鹿」

返事が幾分鼻声混じりだったことに驚いて振り返る。助手席側のドアに身を押し付けるようにしたクリスタは顔を横にねじ曲げ、人っこの一人いない歩道に視線を投げ掛けている。トルコ石のような瞳はいつもの硬さをなくし、テールランプの光で幾重にも滲んでいた。

「クリスタ？」

「今日の客はとっても優しかった」

細く開いた窓のおかげでようやく人の体臭が薄まる。籠もっていた煙草の灰が寒空に引きずりだされていく様子を傍観しながら、クリスタは訥々と言葉を続けていった。

「別に縛られてもフィストでも平気。仕事だし、相手があたしで欲情してるって分かったら気分いいしね。でもあんなに優しいのは困る」

「優しくて困るってなんだい」

本格的に彼女の自宅行き最短経路を迂回しながら、ギャツジは訊ねた。

「あんたの胸見てたたないなんて、病気持ちじゃないの」

「ちゃんと勃ててたわよ。でもただ突っ込むだけじゃなかった。髪を撫でられてほったにキスされて。甘い言葉も掛けてくれたし」

語られる手順は、恐らく本当の夫婦ですらハネムーンの1年後にはすっ飛ばしてしまうようなしつこいもの。少なくともギャツジの母は子供たちが物心ついて以来、夫とそのような真似をしでかしていないはずだった。類似品を求めるならば、それは恋人たちの睦み合い。笑ってもいいのならいつそ笑ってしまいたい。よりによってその客は、ティンゼルタウン屈指のあばずれと貴い真摯さや愛情を共有しようと試みたのだ。

だかその男以上におかしいのは、喋りながらも落ち着きなく煙草を吹かし、時折噛んでつぐむことでめいいっぱいの怖れを表現するクリスタの唇だった。彼女はいつでも好奇心旺盛だし、どんなに過激なプレイでも果敢に挑んで愉しむ淫猥さを備えていた。特に相手から受け取れる金や奉仕は出来る限り貰っておこうと考えるさもしさなど、いつそ感歎すべき領域に達している。

そんな彼女が、全ての動作に「丁寧な」という形容詞がつきそうな愛撫で怯えているのだ。尋常な事態ではない。もっともこの女に尋常さを求めるほうが間違っているのかもしれないが。

「本当に優しかった？」

眼を凝らしていたら、頭上に数年前潰れたレストランの看板が見えてくるはずだ。分かりにくい通りの出口を上目で探しつつ、ギャツジは仄暗い背後に向かって疑問を投げかけた。

「変なこと、されてない？ 自分が気付いてないだけで、実はとてもない変態を」

「されてない！」

飛び上がるほどの大声でクリスタは叩き付けた。

「されてないんだってば。もう、なんで分かんないかな」

「ごめんよ」

謝罪は心からのものだった。子供だと言われても仕方がない。学校を出てタクシーに乗り始めてから何年か。もともと言葉に注意を払わない性格も災いし、ドライバーの必修科目「気の利いた会話」の単位を取るのはまだまだ先になりそうだった。未履修なら沈黙を貫くのが一番無難だが、元来静かさを好まない性格、勝手に唇から言葉があふれ出す。

「あんただってそれくらいの分別はあるものね」

「奥さんが子宮を取っちゃったんだって」

最初からまともに言葉を交わす気など持たず、クリスタはまだ窓

の外を見遣っていた。ひたすら壊れた壁が続く代わり映えのない景色に何を見出したのだろうか。厳しい光を放つまなこは、青や黒、緑や白とそれらを混ぜ合わせた色を複雑な配分で沈ませている。

「不動産の仲介をやってるらしいけど。子供たちも独立してただでも二人つきりなのに、奥さんは晩御飯が終わると自分の寝室に引きこもっちゃうから、彼はいつでも一人ぼっち。淋しいのねって、あたし言ったの。でも彼は違うって」

肺の奥から溢れる煙は湿った赤い唇を通過したとき、過剰な分泌を続ける唾液にタールを絡め取られたらしい。いつもよりも甘い香りが鼻先を撫った。

「同情なんていらない、ただ自分は愛したいんだって。君みたいな良い子に優しくして、親切に扱いたいんだって」

口の中だけでなく目元にまで潤みを帯びさせ、クリスタは煙草を噛み締めた。

「あたしも応えたいって思ったし、彼のセックスは悪いもんじゃなかった。なのにあたし、イケなかったんだ。彼の顔を見ようと頑張ったのに、ベッドの中にいる間、ずっと、ずっと」

ここまで言われて、ギャッジはようやく彼女が胸に浮かべる対象を自らも具現化することが出来た。

「ああ、レスのこと？」

じつとりと胸の奥で焦っていた同情が急速に浮き上がり、喉元で味気ない口調へと姿を変える。

「あんたの職業、承知で付き合ってるんだろ？」

「そうだけど」

何を今更、とはさすがに言わなかった。だがいつまで経っても歯切れの悪い口ぶりは、吹き込む風に巻かれて一層縮こまる。

「それでもやっぱり、心の中では同じこと考えてるのかなあって。あたしが仕事へ出るたびに」

「そんな性格じゃないと思うけど」

「捨てられちゃったらどうしよう」

「大丈夫だよ」

間髪入れずギャジは返した。見ているのに見ていない。女とはそんなもの。だから自分の子供が優れているといつまでも思い続けるし、地図も読めない。

「同情するって言うけど、そんな気なんか」

今だって、本当に視線が窓の外を捉えているかすら怪しいものだった。軽侮を向けられようが見知らぬ場所に運ばれようが、自らの憂いに浸りきっているクリスタは気にも掛けない。

「ただ、飲み込みたくなる。好きだなんて言われると。そうしないとくないんだって義務感みたいなのが」

「女ドン・ファンってわけか」

厚かましいナルシズムとネオンの碎け散ったプラスチック看板、前と後ろから迫りくる煩雑は何の栄養価値も含んでいない。楚々と佇んでいる標識を目にして思い出したのは、この先で二週間後まで続く夜間工事、そして性欲。自分自身に呆れたら、もう最後まで話を聞く気にはなれなかった。車を路肩に停め、ギャジは振り返りざまシート越しに身を乗り出した。

「あのね」

「なに」

窓の外に煙草を投げ捨てたクリスタは、憮然とした面持ちで唇を尖らせた。

「説教なんて始めたら許さないから」

「説教っていうか僕の経験だけど」

「経験が聞いて呆れるわ」

「そりゃ僕は娼婦じゃないもの」

そんな柄でもなくせに、ギャジは汚い言葉を吐くとき、濃い眉を微かに下げた。

「僕が言いたいのは、あんたが好きだ何だって大安売りし過ぎること」

クリスタは黙って口角を下げ、話の続きを促した。

「身体売ってるのが嫌なんじゃなくて、いちいち気をやるから腹を立てるんだ。もしレスが怒るとしたらさ」

「女はプツシーの付いた肉じゃない」

嘆きは半分近くが自嘲で出来ていた。

「温かくて柔らかい場所が欲しいだけなら、プティングに穴でもあけて突っ込んでろって話」

「だからって」

シートと悲哀に身を委ね、ギャツジは自らのジーンズへ手を伸ばした。

「愛情を切り売りしないほうがいいよ」

男にはそんな器用な真似などできやしない。心など。誰か一人の女か、それとも永遠に自分だけのもの。やってくるかどうか分からない機会をじっと待ち続けるなんて、シンデレラも裸足で逃げ出す夢想癖。

妥協したくないとギャツジは思っていた。例えどれほどからかわれようとも。生まれてこの方、襲い来る困難に怖気づかされたことなど数えるほどしかないと彼は胸を張って言うことが出来た、去年辺りまでは。

自信のあった勇気がそれでも足りないと感じたのは、一人ぼっちでハンドルを握ってる自分の姿を客観的に認識してしまったある夜のことだった。幽体脱離のように自らを見下ろした途端、存在すら知らなかった未来が大挙して押し寄せてくる。今までのような怒涛の勢いだけだと、積み重ねた妥協の果てにあるものを受け入れるには不十分すぎるのだ。勝手に流れる時間が、いつの日か強さを上乘せしてくれる時が来るのだろうか。それとも本当に。

もっとも身体の方は機会を待つほど悠長ではない。ちりちりとチ

ヤツクの開く音を聞かされても、クリスタは恐怖や嫌悪を覚えなかった。ボクサーパンツを押し上げる立派なものを覗き込み、少年のような口笛を吹く。

「メーター、戻してくれんの？」

「うん」

動きは素早かった。瞬く間にドアを開いて飛び出した身体は、もう一度睨が上下する前に助手席へと滑り込んでいる。上半身を運転手の膝元に投げ出すことも一切躊躇はない。

「男乗せてもこんなこと？」

まず灰色の下着越しに一度舌を押し付けてから、クリスタは訊ねた。秀でた額に掛かった前髪を掻き上げてやり、ギャッジは首を振った。

「女しか乗せないんだ」

本音が建前か自分でも分かっていないことを口にするのはさすがに大人気ない。だが結局彼は、形のいい後頭部を撫でながら、現れた耳たぶへ優しく囁いた。慈悲が滴り落ちそうな声音と裏腹に、髪を滑る手のひらはまだ汗の一つも滲んでいなかった。

「今夜最後の仕事が好きでもない男となら、あんたも少しは寝覚めがいいんじゃないかと思って」

大きく開いた唇を一旦半開きにまで戻し、クリスタは振ってきた言葉をじっくり噛み締めた。普段は度を超して表現する媚態も、今はお世辞程すら見せる気がないらしい。

「でもあたし」

全く心の籠もっていない口ぶりでクリスタは言った。

「あんたのこと嫌いじゃないのよ」

白々しい笑みに、ギャッジは無言で唇をねじ曲げた。

女が口を塞ぐ。生暖かい吐息が亀頭全体を包んだかと思えば、次

の瞬間には幾分ひからびた口腔内に飲み込まれていた。後はもう、興を削ぐ猛然とした鼻息が車内に蔓延するだけだった。せめて聴覚だけでも自ら管理するため、今まで存在を忘れていたガムを右の奥歯に連れ戻す。顎の動きと共に湧き出る唾液が零れないよう何度も喉仏を上下させ ギャツジは股間で蠢く頭を敢然と見下ろした。

「終わったら何か食べに行こうよ。フライドチキン位なら奢るし」
なかなか芯を通さないディックから口を離し、女は真上の笑顔をじろりと睨みつけた。

「これだからガキは嫌なのよ」

The maverick , The proud .

スリムは我儉な男だ。

本人もそれは自覚していたが、これまでの人生で矯めようと思つたことはないし、周りの誰一人として彼を正しい方向へ導くことはできなかった。理由は単純なようで高度。彼は自分の思うとおりに生きるためにはどうすればいいか知っていたし、実現のための手際よい方法を心得ていたのである。

例えば6年前まで同居していた彼の母親は、毎朝5時になると決まって布巾を抱えキッチンを右往左往していた。眼を覚ましたとき暖かい朝食がテーブルに並んでいないと、息子は数々の罵詈雑言を投げつけ、ひどいときには新聞や灰皿が飛んでくるような事態にまで発展する。物が壊れる音に聞き耳を立て、老女の眼下に浮いた隈を盗み見るにつれ、狭苦しい集合住宅に肩を寄せ合う低所得者たちは一人前に噂を流すようになった。

だがいくら陰口を叩かれ100年に一度の親不孝者の名を冠されても、スリムは一向に頓着しない。彼は12年という歳月を海兵隊員として立派に国へ尽くしたし、毎月欠かすことなく母の年金に高額な生活費を上乗せしてやっている。そもそも不規則な仕事柄、照り付ける陽を朝日と呼べる時間に彼が起き出してくることなど月に数回あればよいほうだった。幼い頃ブラシやハイヒールの踵で散々折檻されたことを考えたら、この程度の横暴など駄々とも言えない。サンディエゴの訓練所に飼われた鬼軍曹は、彼に常なる忠誠の綴りSampers Fiと開き直り、そしてゲームの規則を教えた。時には過程そのものが意味を持つこともある。例えそれが結果を不本意なものに変えようとも。

結果だけを考えれば、スリムは自分で食卓を整えることに一切不満を抱いていなかったし、母が腎臓癌で冷たい土の中に埋められた後は何事もなかったかのようにキッチンへ立っている。特にフレンチトーストの焼き具合など、そこらのダイナーのコック顔負けの腕前を有しているほどである。

母の食費が浮いて多少の余裕ができた生活費に慢心することなく、彼はまわってくる仕事を勤勉にこなし続けた。イスラム系テロリストが放った迫撃砲で小腸の一部を吹き飛ばされたにも関わらず、支給される年金は雀の涙ほど。事あるごとに吐き出される怒りは最初こそ在郷軍人を代表し、社会保障の不備を訴えているだけだったが、だが時間を経るにつれ彼の気炎が隊の根幹を成す忠誠心にまで及ぶようになると、途端観客は興味を抱き始める。スリムが見る見るうちに酒瓶を開け憎しみの籠った声をあげるたび、カウンターに並んで耳を傾ける行きずりの客たちは、その不遜さに驚き半分畏怖半分で震え上がるのだ。

対して酒場の常連客は、彼が口先だけの男ではないことを嫌と言うほど知っていた。喚き散らしているのならまだ序の口、機嫌が良いとすら言える。本当の恐ろしさはアルコールを燃料にした燃え盛る炎ではない。酔っていないときこそ、スリムの狂気は真価を発揮した。タパスを隣のテーブルに投げつけたり、新顔をビリヤード台に追いやって力モっているうちが花だ。行き過ぎた悪ふざけや突然の癪癢に巻き込まれぬよう気をつけておけば、スリムは酒の相手として愛すべき存在とすら言えた。

もつとも口では散々痛罵するくせ、彼とて海兵隊の亡霊から完全に逃げ切ったわけではない。未だ横流しのM14DMRに固執しているところがその最たるもので、手に馴染んでいるという言い訳の

元、神経質なメンテナンスを施されたライフルは未だ彼の生活に重要な役割を果たし続けている。伊達に選抜射手を務めていたわけではない。うらぶれた雑居ビルの一室へ忍び込み、剥がれかけたリノリウムに片膝をついた姿は「ソルジャー・オブ・フォーチューン」にスナップが掲載されてもおかしくないほど堂に入っている。実際、その肉体はカメラに切り取られたかのように動かなかった。写真でないとは分かるのは細く開いた窓から入るそよ風が伸び気味のジャーヘッドを揺らすからで、それとて襟足の辺りはびくりともしない。かれこれ1時間近く、スリムは耐え難いほどの柔らかさを持つ温もりに顔を晒し続けていた。普段の触れなば切れんといった狂猛は新緑色の瞳から削ぎ落とされ、ひたむきに照準器の向こうを見つめている。

高曇りの空は晴天の予兆だった。明日になればでこぼこした屋根が連なる裏町にも、気持ちよく太陽の光が降り注ぐだろう。洗濯物は数日分溜まっていたし、脱ぎ捨てられたパーカーも30半ばの男が二ヶ月着続けたに相応しい匂いを纏っている。すぐ傍で揉み潰したばかりのラッキーストライクが垂れ流す紫煙も吸い込んだことだろう。いつそ帰り際にそこらのごみ箱へ突っ込んでやりたかったが、冷え込みが厳しくなるのはこれからだ。夏は蒸して冬は凍えるティンゼルタウンの生活へ慣れれば、アメリカのどこへ行っても快適に過ごせる。数多くの転属を繰り返すうち、スリムはその事実を自らの肌で実感していた。

玉虫色の空気が顔を包むに任せ、銃を構える時間は神秘的だった。スリム自身は神を信じているわけではないし、悪魔に促されてアベックを狙い撃ちにしたサムの息子の如く自らを美化もしない。ただ、眼球から右手の人差し指に直通神経が通う瞬間の連続体は、彼の頭をヒマラヤ山脈の空気の如く清涼化させた。軍務としてなら国に対

する義務を考えるための時間であり、冷えたビールばかり夢想する果てのない待機。それがポジションを砂漠から市街地に変えた途端、単調な生活を仕切りなおすための貴重なひとときに変身する。中東にいたときは思いもなかった事態に自嘲でも漏らすしかない。適度に集中力を駆り立てた後に飲むものは何でも喉ごしがよく、飯も心なしが美味い。女に対してもより一層熱くなれる。体内で起こる変化が一体どういったものかは皆目検討がつかないものの、趣味と実益がぴったり重なり合っていると考えれば問題は無い。はつきりいつて、スリムは今の仕事を気に入っていた。平和なはずの国内に戻っても、結局命を量りに乗せ続けているという事実を笑い飛ばせるほどには。

仇名とは裏腹に太く、鋼のような腕が持ち上がる。人差し指と中指だけを抜いた黒い皮手袋が皮膚に同化し、待ちきれない爪が引金の固い金属を掻いた。所々粉になった石畳を、斑模様の日差しが一層混沌としたものに変える。少しだけ変化に富んだ俯瞰図には生き物の気配など見当たらない。存在していることは間違いなかった。時おり風向きの気まぐれで、ヒップポップまがいの曲が下からのぼってくる。道を挟むようにして繰り返される同じ形をした窓のうち、一体どれから聞こえてくるのやら。銃声も同じように劣化したコンクリートの手で反響させられ、空へと駆け上がるだろう。屋上を闊歩する鳩も驚いて青空へ逃げ出すに違いない。

彼が自らの手で驚かせいじめる予定だった鳥たちは、思った以上に神経過敏だった。狙撃銃を構えなおし、曲線を描いた銃床を肩に付ける。表面だけ熱を持った頬に木の銃身が優しい冷たさをもたらす。

視界に滑り込んできたのは黒く塗りなおしたらしいアストロで、照準器越しにも十字架のエンブレムがきらりと光る。改造され喧しくなった排気音と閉め切った窓ガス越しにも聞こえるミート・ローフのがなり声に、空気すら縮こまって固まった気がした。スリムは一度顔を銃から離すと、消しゴムくらいの大きさになったバンを肉眼で確認した。影と同化している後部に対し、陽光の中に突き出た運転席は丸見えだった。助手席にも一人、恐らく後部座席にもお目当てだけでなく、搭乗限度ぎりぎりの人数が押し込められているのだろう。写真で見たわざとらしい余裕ぶった態度と裏腹に肝は小さいと見た。車のエンジンを切ることはおろか、シェードを入れた窓すら中々開ける気配はない。

停止してから数分がたち、ようやくスライドドアが開いた。まず姿を現したのは部下の男、黒人。反対側のドアからも一人。右手に握り締められているのはデザートイーグルらしかった。映画の影響で持ち歩く奴がやたらと増えたが、ハリウッドスターと同じ撃ち方をしたらあつという間に肩が外れて真後ろに吹っ飛んでいくことをその殆どが知らない。アフガニスタンで指導した警察学校の生徒ですら最初は片手撃ちで決めようとしたくらいで、今更ながらスリムはメディアの弊害をしみじみ実感せざるを得なかった。

腹を揺すりながら歩くブルドッグと同じ動きで、その男がステツプから足を下ろす。取引相手はまだ来ていない。最初から来ない。スリムに金を渡した時点で、正々堂々物事を成す気など更々ないのだ。後は流れ弾や警察の余計な詮索に巻き込まれないよう、じつと部屋の中で息を潜めるだけ。もともと節穴の眼を持つ警察官はともかく、7・62x51mm弾は人間の頭蓋骨を造作もなく貫通する。ここから先はスリムの独断場。1つ、2つ、と心の中で数え、車を

背に立つ男の丸刈り頭に意識を集中する。息巻くエンジンに身を委ね、得意の歌でも口ずさんでいるのだろうか。声までは聞こえなかった。本物のブラックであることは間違いないのだが、肉体が発する音の消えた状態で口を蠢かすのは白黒映画の中に取り残されたミントレスショー役者のように紛い物臭い。

事実は違えど本質はあながち間違ってもいないのかもしれない。レンズで無理やり近づけているものの、実際の二人の距離はひどく遠い。目測では500メートル。同じ地平線上にいれば、すれ違うという言葉すら使えなかった。

何が違うか、正しいか。知っているのは自らのことだけ。スリムは物事を貫く力を有している。必要なことは、それだけだ。数が5まで達しても、男は動き出さなかった。

人差し指に力を込める。

人体に感じられる距離など銃弾は軽々と飛び越し、スコープの中の世界を粉碎された頭蓋骨と血肉に染め上げる。車の窓は防弾仕様だという情報を耳に挟んでいたが、頭を貫通した銃弾は見事にサイドウィンドウに白い蜘蛛の巣状のヒビを入れた、のだろう。後は恐らくシートにでも食い込んだらしい。何にせよ追いかけるようにして飛び散った肉片が全てを覆い隠してしまった。

取り巻きたちが顔を上げるのは頭領の左後頭部が弾けたせいではなく、発信源の分らない銃声への驚愕によるものだった。スリムが照準を定めても、男の手に握られたデザートイーグルの銃口はうるうると標的を探しあぐねている。努力は実らず、イーグルマンは真横に吹き飛んでビルの壁に叩きつけられた。助手席から飛び出そうとしたもう一人は勘がいいのか、ウージーらしきものを片手にこちらを見ようとする。眼が合う前に鼻の辺りは開いた花卉の如く血で染まり、瞳が意識を放棄した白色に変わった。握り締められた銃

は明後日の方を向き、短い連射音が狭い路地の上下左右を跳ね回る。最後の締めはリーダーの死体を後部座席に押し込もうとする男だ。痩せこけた体は力の抜けた巨体の肩口までを収納するだけで、もう精一杯。だが肥満した屍は見事な盾になり、急所を隠してしまう。車はもうすぐ発車するだろう。開いたことで余計かまびすしさを増したミート・ローフの声が消えた銃声を被さり、リミットを刻む。

必要なのは貫く力。動きではない、息の根を止めてしまうこと。

肩口に掛かる強烈な反動はいつそ快感だった。胴から、尻から、赤い霧が次々と舞い上がる。痙攣する肉の動きはまだ生きていると見まがうほどで、覚せい剤を打ち過ぎた末の偽オルガスムスに良く似ていた。ぐにやりと垂れた腕を掴んでいた手が離れ、こちらに向かつて合図しているかの如く大きく振れる。

4 発撃ったところで、最後まで忠実だった男は最低限の動作を以ってその場に崩れ落ちた。

もしかしたら運転席まで被弾しているかという樂觀は、亡骸を投げ出したまま発進したバンによって覆された。最初から期待していなかったので、照準器ごと視線を動かして見送る。遠ざかっていく音。付け足された四つの肉体を除き、路地は車がやって来る前と何一つ変わらない状態に戻った。

しばらくそのままの姿勢で状況を確認してから、スリムは銃を体から離れた。ブーツキャンプでの訓練どおり手早く分解してナツプサックへしまい、パーカーに袖を通す。立ち上がったときには長時間の無理な姿勢ですっかり肩や足腰が強張っていた。培った筋肉は見た目こそ衰えておらずとも、比較の対象が現役の海兵隊員時代で

はさすがに幾分か劣る。かといってジムに通うほどの向上心など全く持ち合わせていない。今日だってアパートに帰ったら、カロリーのことなど一切気にせず冷蔵庫の中のバドワイザーを開けるのだと自ら確信していた。太陽が地平線へ近付くにつれ暑さを増す部屋は、鍵をこじ開けた時に比べむんとした熱気を孕んでいる。刺すような冷たさと苦味が喉に流れ込む瞬間を考えただけで、壁を殴りつけたいほどの高揚と焦燥に駆られた。

ドロップキック・マーフイズの「ワーカーズ・ソング」を口ずさみ、ビルの裏口を潜る。地上は意外と涼しく、切れ切れの雲間から青空が覗いているのが分かった。

ふと考えたのは、モーター音のうるさい冷蔵庫に見慣れた缶が入っているかという問題だった。6本パックを詰め込んでおいたのは3日前なので、正直自信がない。家に誰もいない不便を感じるのはこんなときだった。母がいれば怒鳴りつけることで20分後には望みのものを手に入れることが出来る。怯えと反抗、たきつけられる激情。ちよつと考えれば分かる。いくら便利でも、手間を考えるとないほうがいいものもあるのだ。

彼女は何も気付いていなかった。気付いて欲しいとスリムが願うには、彼の憎悪は余りにも根深すぎた。ヘアブラシ、靴の踵。連れ込まれる男たち。不足は怒りを発散させる口実だ。手段が悪いとは全く思っていない。社会的にも有益とすら考えている。適度のガス抜きは、夜になって仕事の終わった女と遊ぶ際、少しでも相手を怖がらせることなく楽しい時間を過ごすために必要な儀式だった。そのような剥き身のままのむらつ気を怖がる女を彼は好む。彼の中で、恐怖から本来の意味が抜け落ちて久しい。そう形容すべき感情は、いつでも心を慰撫した。特に、他人が催すものは。

様々な要因が擦れ合って出来たさがを本人も自覚していたが、今更矯めようと思ったことはないし、周りの誰一人として彼を正しい方向へ導く気など起こさなかった。彼は自分の思うとおり生きるためには周りを適応させればいいことを知っていたし、実現のため時には逆に自らを適応させる方法を心得ていたのである。

スリムは本当に我侭な男だ。

i f

それはもしかしたらこのようにして起こったのかもしれない。

まず抜け出すのは簡単、そいつはすごく頭のきれいな奴らしいから、いくらでも方法は思いつくだろう。ここはブロードムアやアーカム・アサライムじゃない。

奴は三階南棟にある職員用トイレにある窓のサッシがガタガタで、5分も力任せに引つ張れば外れるのだということを知っていたらしい。僕だつて知っているくらいだから。身を乗り出した真下は裏口の軒。コンクリートのしつかりした造りだ、上手く頭をぶつければまあ、8割方死ぬ。そう、何フィートの高さがあるかは分からないが、そんなところから飛び降りるなんて自殺行為だと看護士が小便をしながら喋っているのを聞いたことがある。このご立派な職業に就いた方々は、医療刑務所に入った人間が自殺なんて言葉に怯むと本気で思っているのだ。忌々しいカトリックどもめ。でも忘れないうで欲しいのは、レクリエーションルームで涎を垂らしている連中の数倍利口なテッド・バンディですら、更なる刺激を求めて裁判所の二階から身を躍らせたつてこと。ちょっと運動、たとえば小さい頃YMCAでサッカーでもやってたら、きっと足首を捻りもせずには上手く着地することができる。

彼もきつと昼の2時ごろ、チェッカーの相手がいなくなつて暇をしたから、ちょっと散歩しようと考えたのだと思う。白いムーミーみたいな病院着は目立つから丸めて大便器の後ろにでも押し込んで、

下着一枚とスニーカーで窓枠を乗り越える。もちろん知つてのとおり裏口の傍には物干しがあつて、ぱりつと糊のきいた看護士の服が干してあるから、後はそれを着て柵を乗り越えるのは容易いことだとはご想像の通り。僕個人の意見としては、もうちよつと有刺鉄線の電流を強くするがいいと思う。あれくらいなら掌は多少焦げるけれど、まあ、耐えられる。

とはいつても頭のいいそいつだから、病室も町もそんなに変わらないのだと気付くのに時間は掛からなかつたんじゃないか。ラガフェルド通りを歩く間ずっとドミノピザの空き箱につけ回されたり、ソフトクリームを食べてる５歳くらいのガキが「世界崩壊の序曲」なんてエンドレスで喚いてたりしたら、普通の人間だつてうんざりするに決まつてる。だから通りから奥まつたところにあるアパートでちよつと休憩しようと考えた。あそこは娼婦が多い。というか、ティンゼルタウンの南には娼婦が多すぎる。フツカーなんて最近では使わないのかも知れないけれど、あいつが言いそうなこの呼び方を僕も採用したい。端的だし、語感がいい。白人っぽい。

ああいう連中の住むようなアパートについてる鍵は見掛け倒しだから、そいつも最初はそこらへんのパイプでも叩きつけて部屋へお邪魔しようとしたに違いない。実際、一回は壊そうと試みた跡があったとか。でも真昼間からそれは失礼だ、普通に考えて。近所迷惑だし。鍵があるなら、礼儀正しくドアを開けて入れればいいじゃないか。電気メーターの上に鍵があるってことは空室だから、いきなり踏み込んでか弱い女性を驚かせるようなこともない。

家賃が下がれば下がるほど、住民が部屋に残していく荷物の量は増えるつていうことを恐らく奴も知っていた。何でもその部屋の床には忘れ去られた服と靴が散らばっていたそうだし、家財道具についでるガラスというガラスは全て割られていたそうだし？ テレビ

に放尿してあったとか？　よくある話だ。目新しくも何ともない。もっともこれはハシシのせいじゃない、だって万引きできないから。最近の売人は怖い。何か揉め事を起こしても段階を踏んで上の人間が話しを付けに来るんじゃない、いきなり売ってる本人が銃を片手になだれ込んでくる。まあ僕だって、そんな仁義ある時代は噂でしか聞いたことがないけれど。

ピザの箱もさすがに階段をのぼることは無理だったはず。だってあいつには足がない。耳はあるけれど。僕もピザを食べたくなってきた。最後にシカゴ・ピザに行ったのは一体何年前の話か、とにかく包丁を持って行って、それで母さんは前の晩豚肉のブロックを一口大のサイコロ型に切っていた。シーフードピザを一切れ分けて欲しかっただけなのに警察がやってきて、僕に包丁を渡せって言ったらそんなことをしたら母さんに怒られるって言い返したらそのビール腹のポリ公はリーを押さえつけて、リーが包丁を振り回したらたまたまポリ公の顔を切って飛び上がった隙に逃げ出したらうっかり何かぬるぬるするものを踏ん付けて転んで結局シカゴ・ピザって赤いペンキで書いてあるショーウィンドーに頭から突っ込んでそれでも這い出して見せるのに店の周りでみんな驚いていた。その中にはキヤメロン叔父さんに似ている人がいたけどキヤメロン叔父さんじゃなかった。キヤメロン叔父さんの顔は豆鉄砲を食らって驚いてそれから気まづくなつて笑いながら心の中では撃った奴に邪悪な仕返しを企む二ヒリストな鳩に似ている。そんな奴、乗ってる車がぶつかって炎上爆発して30フィートくらい跳ね上がったらいって思うのに「バニシング・ポイント」とか「ダイハード」みたく激しく死ねって中々そうはいかない。死んでるかどうかわかるのにもう一度銃を頭へ撃ちこめばいいっていうけど、それなら最初から頭を狙えばいいのにどうしてわざわざ胸なんか撃つんだろう。ウーじーってそんなに命中精度が悪いんだろうか。撃ったことがないから

分らない。いや、もしかしたらあるのかもしれないけれど、いちいちこの銃は何だってテキサスレンジャーみたいにこだわったりしない。弾を買うときも拳銃を店へ持って行ってこれに合うのって言えばいい。買ひ物は効率よくしないと。最近仕入れてるスーパーマッシユルムが高いって食堂でスープをよそう係の男が言ってたけれど、彼の名前が思い出せない。ジーノだったか、ライバックだったか。ケイシー・アンソニーが出所したとか、世の中は本当に酷いことが多い。何にせよ、よちよち歩きの赤ん坊が死んだっていう事実は事実なんだから。推定無罪だろうが有罪だろうが、検察側の証人の父親……が、どうしても言うから僕は結局あれを舐めた。苦かったし、吐きそうになった。頭がくらくらした。3歳の子供になんてことをさせるんだろう。そう、生のままの、ジンなんて。兄さんがイラクへ行く前に行った何て名前かとにかくイタリアっぽいレストランでギムレットを飲んでいたけれど、フィリップ・マローウじゃあるまいし、さよならを言うのは、少し死ぬこと、いや結局死ぬ気もない。兄さんのことを言ったなんて。どうでもいい。どうせ僕のことなど茶色い毛並みで尻尾が細い小さなネズミくらいにしか思っていない。僕は疎外されている。彼の生活からもしもを抜いて実際に僕が割り込んだら……無理がありすぎる。自分の事で一杯なのに、これ以上欺瞞を抱えきれない。結局僕はこのままここでずっと、いや、ここでずっと、僕は僕の人生を終えるしかない。まるで終身刑。それも悪くない。騒いだって始まらない。それにどうせ。

奴が管理人に 名前はどうでもいい、興味なんかない 手をかけた理由は、お決まりの快樂由来だと僕は推測する。僕の推測だ。驚いて襲い掛かったっていう性善説に固執したいならそうすればいい。野生の熊だってハイキングしている人間を襲うときは、その大半が敵意じゃなくて恐怖から相手を張り倒すって言うし。けれどパ

ニツクに陥った人間はリムジンのホイールキャップで殴りかかるような真似はしても、その後昏倒した男の首に思い切りそれを突き刺して切断しようとはしない。いや、刺さりもしなかったのか。仰向けの体へ跨って、喉仏にホイールキャップを当てても、血と汗で滑る皮膚のお陰で何度も傷んだフロアリングに鋼鉄が当たるだけ。結局諦めてダクトテープで手足を縛りつけた後、どうしたか。写真でも撮ろうと思ったか、まさかそんなことは。ちよつと火あぶり位にはしてみようと思ったか、それは僕も否定できない。何故ならその部屋には半分くらい使った跡がある「レッドスナッパー・ダイニング」のマッチが転がっていた。それに、薄暗がりの中転がされて芋虫みたいに跳ねてる男は何となくベトナム人みたいな顔だった。ベトナム人は焼身自殺が好きだって、昔何かのドキュメンタリーで言っていた。

そのうち意識のしつかりしてきた男が、大声で喚き散らしたのは想像に難くない。「たすけてああたすけて」なんて甲高い声を出されたら隣の部屋にも聞こえてしまう。だから窒息寸前になるまでダクトテープを口にべたべた、狂ったみたいに首を振るから一発顔を殴ってから馬乗りになった両膝で男の喉下を締め付けて、二重、三重、四重。何だか芸術的に感じて眼にも、頬にも、終いに手当たり次第貼り付けていった。頸動脈が今にも爆発しそうなくらいびくびく脈打ってるのが布越しにも太腿へ感じる。さぞかしい気分だったろう。人間が殺されそうになったとき、抵抗しようとは一番動くのは？ 実は腕じゃなくて腰から下。いくら汚いスニーカーが滅茶苦茶に床を蹴っても、上半身に乗上げた犯人を撃退することはできないのに。その男も、きつと。そんな様子を見せたら、奴が一層興奮を煽られることなんか知りもしないで。火あぶりだけじゃ面白くないから、ガラスでもまぶしてやろうか、包丁はないか。塩酸が欲しい。頭がカッカして、胸がわくわくして、無性に唇の乾きが気に

なつて何度も舌で舐めなくなる、そんな気分になる。

しつこいようだけれど、これはあくまでも仮定の話だ。実際の犯人がどんなことを考えていたかなんて僕は知らない。空想を長々と、無意味だと笑うかもしれない。無意味な生、無意味な死。けれど現実だって、無意味だと思うことから意味のあることを見つけないと、人間は退屈と絶望で死んでしまふに違いない。

その作業過程が快樂つて奴で、そういう意味では僕なんか、一級の快樂主義者つて言えるかもしれない。

男は助かった。生きようとする努力は無駄じゃなかったことか。この国は、私立探偵の免許取得に関してもうちょっと規制するべきだと思う。あの暗いブロンドを思い出ただけで吐き気がする犬みたいに血の匂いを嗅ぎつけてくるその能力は脱帽というほかない。いや、実際に昔は官憲の犬だったらしい。あの手錠なんか、退職して以来返してないんじゃないか、公用の物品の私物化なんて買う金を払ってるのは一般市民だって言うのに。

ああいう奴は想像力が欠如しているから、平気で人を走っている車から門の前に投げ出したりする。もう一度柵を乗り越えて、服を洗濯籠に投げ込んで、雨樋をよじ登って、トイレに侵入する人間の苦勞なんて何も考えちゃいない。途中で窓枠のささくれが思いつきり掌に刺さったりして。掴まれた襟首と一発腹に食らわされたパンチは堪えた。とそいつも思ってるだろう、今頃。

つまらない、本当につまらない。こればかりは無意味でしかない。いくら僕でもそれくらい分かる。

昼間ももう少し巡回の回数を多くしないと、今度は本当の死人が出るかもしれない。これも仮定の話。実際どうだなんて、僕に聞かれても分からない。頭のおかしい人間に、これ以上のことを聞くのは馬鹿だ。こんなところで辛抱強く時間を潰しているくらいなら、もっと建設的なことをすればいい。

なぜなら「かもしれない」なんて言ってられるうちが華で、「今」がやってきた瞬間、気付けばその首にはナイフが突き刺さっているかもしれないのだから。

meet Grolia

溺れる直前で眼が醒めた。瞼を開けた途端ランダムに選ばれた夢の断片が白い天井へ消えていくのをはつきりと感じ、冷や汗が止まらない。残った部分だけでも恐怖を感じるには十分だった。つるはし。長い髪。そして闇。^{グロリア} 栄光と程遠いどん底の世界。暗黒などには怯む必要もなかった。見えなくてもどこに落ちるかは分かる。知っているのに手をこまねいているだけしかないという事実が、何よりも恐ろしかった。

コックを捻りシャワーを止める。体を流れ落ちた最後の水滴たちが排水溝へ流れても、ダリルはバスタブに頭を預けたまま天井を見上げていた。もやが掛かったままの思考は昨夜の残滓を辛うじて残している。そのまま寝入ってしまうなんて。疲れていたわけでもないのに。いや、体こそ疲弊していないものの、心は履き古した靴下のようによれている。昨日は消えた女を追って一日中街の東側を歩き回った。流れるブルネット、雑踏に埋もれる記憶と存在。見かけたとの情報を聞いたのは4日前だった。3日間は外した。だがダリルはその日の朝、今日こそは彼女を発見できると根拠のない確信を抱いていたのだ。

確かに女はいた。まだ日も落ちきっていないのにプールバーでピンク色の甘い酒を飲んでいた。探していたのとは別の人間だった。彼女が傷んだ黒髪とゴールドの爪で品のない誘惑を仕掛けてきた時、ダリルは情報を流した人間へ恨みをぶつけに行こうと決めた。

軋む節々に顔を顰めながら、額に張り付くダークブロンドの髪を

掻きあげる。ドアまでの道のりを見遣ると、くすんだタイルの上には入ってきたときそのまま、脱ぎ捨てた服がごちゃごちゃと散らばっていた。立ち上がったとき、また少し腹に回った贅肉を見下ろす。分署にいた頃ならば、地下の備品室横にあるジムを利用できた。だが定期的な運動をやめた途端、太りやすい彼の肉体は続々と余計な脂肪分を蓄え始めている。誰かに責められる気がした。でも責められないことは分かっていた。

髭を剃った後に含んだリステリンを、いつもよりも長い間口の中に溜めておく。アルコールとミントのお陰で口の中は弾けそうだが、それとて脳に至る神経のどこかが詰まっているお陰で期待する効果を發揮しない。いくら柔らかい粘膜が痺れようと、視界にノイズが入っているような感覚は一向に消えなかった。

四隅が曇った鏡と向き合ったとき、そこに映っているのは窓の外に佇む寂れたビルと、典型的な30男の姿だった。眼を腫らし、もみ上げから顎にかけての肌がぶつぶつしている。だがみつしりと肉の付いた二の腕は、まだまだアングル・サムのたくましさに溢れている。捨てたものではない。それでいい、今のところは。過去と現在を比べることを、彼はできるだけやめるよう心がけていた。

一通り命題から結論までを組み立て終わったら、後は成すべきことに向き合うだけだった。必要なのは、しゃきつとして身なりを整え、部屋から 事務所兼住居の薄汚いホテル・ガリオンから出ること。首を傾け、むくんだ顔を出来る限り鏡のくもりから遠ざける。夜は明けたばかり。課題はあれど、一日を良いものにする鍵はまだなくしていなかった。そのためにはまず、頭を動かなければ鏡に映る全てを強く睨みつけながら、ダリルは口腔内で徐々にぬるさを孕んでいくリステリンを飲み下した。咽頭から食道へ、染み込むように刺激が広がっていく。鼻と眼の奥が燃え上がる感覚に、昨晩から持ち越した怒りが再び鼓動を打った。何としても、不確かな

情報をちらつかせた連中に挨拶しなければ気が済まない。例え相手が神に仕える身であろうとも。脳の回転が加速すればするほど、憤懣は熱を持って身体へと擦り寄ってきた。引っ掛けておいたタオルで顔を乱雑に拭くと、ダリルは足音も高くバスルームから抜け出した。

後からやってきた違法駐車の前と薄汚い雑居ビルに囲まれ、チャーチ通りという名の由来となった聖ポロヴィニア教会は、ごごんまりとした外観を一層小さく見せている。にも関わらず、ヨーロッパの寺院をそのまま移し変えて改築したような建物は、臆することなく自らの異質さに胸を張っていた。庇に据えられた山羊の頭を持つガーゴイルが、礼拝者の持つ疚しさを問い質すよう仰々しく見下ろしている。ゴシック様式の変形版とでもいうべき分厚い石造りの壁は、本来広く開かれた存在であるべき教会にどこか閉鎖的な空気を醸しだしていた。

よく磨かれた重厚な木製ドアを潜り、ダリルは静まり返った礼拝堂内を見渡した。長椅子に腰掛ける信者たちはちらほら見受けられるものの空気はまだ朝の鋭敏を保ったままで、ちよつとした溜息でも点された蝋燭の火が掻き消えてしまっただった。

やたらと高い天井などお構いなしに籠るかび臭さへ好意を抱くことは一生ないのだろう。高窓は大きく、聖母をグロテスクに描いたステンドグラスがはめ込んであるものの、建物の内部は明るさという言葉とおよそ無縁だった。隠しただけの気鬱が再び鎌首をもたげる。胸を圧迫する苛立ちに促されるまま身廊を突っ切ろうとした時、ことんと小さい音が背後で響く。

空のバケツを床に降ろして跪いたシスター・ジョイスを見下ろし、ダリルは露骨に侮蔑的な表情を浮かべた。

「亭主は？」

「主は天上に」

十字を切って立ち上がった尼僧から怯えを取り去れば、何もなくなってしまうだろう。本人が上手くかわしたつもりだと思っている問答を紡ぐ唇は、哀れを催すほど震えていた。正面の青い眼を見つめ返すことすら出来ず、顎を喉元にくっ付けたままバケツを取り上げる。

「何か御用ですか」

「アルクインはどこだ」

「外出中です」

教会を取り仕切る男の名前を出した途端、ジョイスの頬へ僅かに赤みが差す。不健康そうな肌色に血が上ったとき、この女がそれなりに整った容姿であるということが初めて分かる仕組みになっていた。普段は長身を恥じるように背中を屈め、紅茶色の瞳を常に伏せている。今も視線は床に落ち、それなのにどこへぶつかるでもなく身廊を横切っていくのだ。

「忙しい方ですから」

「朝早くから大変だな」

広がる衣の裾を踏まない位置にぴったりとつきながら、ダリルは眼を細めた。

「待たせてもらうぞ」

「今日は夜になるまでお帰りにならないと思います」

裏手まで付いて来そうな気配に焦れたらしい。振り返った瞳は、いつもの憂いとは別にはつきりとした拒絶を含んでいた。

「神父様が何をしたというのです」

「ガセの情報を掴ませやがった。ニーナ・ウィロックス、16歳の女が家出した。あんたの神父さんは教区巡回中、『ケーブル・ガイ』にいるその小娘と喋ったって確かに言ったぞ」

「あの方がそう仰ったならそうなんでしょう」

「見事に人違いさ。写真も見せて、名前も聞いたってお墨付き、しかもコンテンツ量はお布施の50ドルって、あいつの説教と同じで

大したペテンだよ」

きつ、と音がしそうなほど、ジョイスは眼の前の顔を強く睨みつけた。

「ここは神の家ですよ」

使い古された常套句を吐く唇の持ち上がり方は、神に身を捧げている人間が見せていいとは到底思えないほど反抗的だった。覚えた既視感に、掌へ爪が食い込む。

「もう少し言葉を」

「宗教問答をしにきたわけじゃない」

こみ上げる怒りを噛み潰し、ダリルは唸った。

「事実を質しに來ただけだ」

「あなたはいつも事実を捻じ曲げるのですね」

浮かぶ清い哀れみが、色とりどりのガラスを通して差し込む光にぶち当たって奇怪に変形する。

「奥様のことだって」

「黙れ」

鋭い言葉は低かったが、まっすぐ続いた身廊を一直線につき抜ける。椅子に腰掛けていた老婆が一人、驚いて振り返る。睨みつけてやれば渋々と元に向き直るが、これでまた一つ哀れな信者の、そして教会の被害者意識が持ち上がったことは手に取るように飲み込めた。迫害される宗教、不遜な現代人に無体されて。神に愛される資格などないとは分かっていたが、負けることだけは許容できなかった。

「あんたが神父とやってることと、どっちが罪深い？」

戦慄が作る沈黙の中に逃げ込んだものの、見開いた目はやはり雄弁だった。コルネットから零れた瞳と同じ色の前髪が一房、強張ったこめかみを隠している。沈殿した怒りをどこまで叩きつけて良いものか。意識した以上に険しくなる口調に余計苛立ちながら、ダリルは女の眼を覗き込んだ。

「いいか、お互い様なんだ」

焦点は合っておらず、既に逃避の態勢に入っていることは分かった。だが伝言を託すぐらいは可能だろう。

「最初から分かりきったことだろう。やるべきことをやるだけだつて。別にあんたらのことを責めちゃいない」

「許しの心を持ってください」

今にも消えそうなほどゆらゆらとした口ぶりでジョイスは呟いた。「奥様を許してあげて。そうすれば貴方もきつと救われます」

「そんな話をしに来たんじゃない」

肩を掴んで揺さぶりたくなる衝撃を懸命に抑える。

「俺が知りたいのはアルクインの居場所です」

「貴方は本当は優しくて良い人でしょう？ あれ以来、だれの命も奪っていない」

「もういい。電話するように言ってくれ」

声を荒げなかったことが奇跡だった。握り締めた指の関節が白むほどの力で、ようやく憎悪は抑えられる。ぶつけるべき場所はここではない。理性が叱責する。いつからか、自らの声は神以上に厳しく強固にダリルの心を戒めるようになっていた。揺らぐことはあるだが崩れることはもう二度とない。教会の聖なる罰当たりにも、無差別にアパートの管理人を殺すサイコにも不可能なことを、見えないう神や悪魔にできるはずがない。

踵を返したら、今度は避けていたはずのジョイスが追いつがってきた。外れかけた取っ手が、ブリキのバケツにぶつかってかたかたと音を立てる。

「今度、来てください。貴方は嫌うかもしれないけれど、その、問答をしに」

「何のために」

「必要な気がします」

一つの黒い影になった女の上目遣いは、今から折檻に進んで身を晒す殉教者のよう。幾分鼻白んだ顔を見ても、彼女の中にある懸命さは揺らがなかったようだ、珍しいことに。

「何故かとか、何のためにとかは、上手く言えません。でも貴方はいつも、自分の中に抱え込んでしまうから」

「丸裸にされてソースを掛けられるのはごめんだ」

にべなく切り捨てることに良心の呵責がないとはいえない。だがそれは、彼女が望んでいたものではなかった。精一杯張り詰めていた勇気もとうとう撤退し、ジョイスはまた最初と同じように頂垂れてしまった。その場で根を張ってしまいそうな重い果敢なさが、頭の天辺からつま先にかけてまでを貫いている。そのまま放っておくのはどうかと考えるものの、義理はないのだ。はつきり言う、面倒くさい。既に頭は次に向けて切り替わっている。この女が余計なことを言わなければ、30秒で移っていた新しい行動に。

「連絡を頼むぞ」

それだけ投げつけると、ダリルはやつとのこととで気に食わない場所から去ることに成功した。

手札がなくなってしまったという現実は厳しい。だが逆に考えれば肩の荷は降りたと言える。忌々しい聖職者の手助けで報酬を得るのは、彼にとつて一種の侮辱だった。えらそうな事ばかり言って、全てが嘘っぱち。古臭い教えでは何も救えない。落ちるばかりだ。ジョイスも、そしてグロリアも。^{栄光}

街の南を一巡して帰る形になったため、気付けばホテル・ガリオンのシックな看板が見えていた。バスルームの窓が開いている。今朝あれだけ未練たらしく居座っていたのに、気付かなかったなんて自らの失態にダリルは舌打ちした。

ホテルの隣に聳える廃墟は普段、悪ガキどものレクリエーションと憩いの場として活用されている。彼らは朝が遅いから、9時を回ったばかりのこの時間帯は騒がしい歓声も聞こえてこない。スプレ

一缶の下品な落書き、甘ったるいシンナーとマリファナの匂い。幾つか入ったテナントも土地柄に恐れをなしてすぐ引き上げられ、今では宝の持ち腐れ。いかめしい灰色の外壁はくすみ、手入れが成されていないせいで劣化するのも早かった。

外装が汚れるのと同じくらい速度でダリルの手から栄光グロリアが零れ落ちたのは、このビルが落成される数ヶ月前のことだった。幾重にもコンクリートが重ねられる予定の土台は思った以上に乾いておらず、靴に尖った顆粒を付けていた。セメントを攪拌する機械の音だけが夜の闇に重く響く。保護シート越しに見た月は今にも雨を呼びそうにくつきりと近かったことを、ダリルは昨日のことのように思い出すことができた。

泥にまみれたグロリア。沈んでいくグロリア。それでも何より美しいグロリア。

その冷酷を許せないのに、打ち砕いてしまったのは自らの手なのに、ダリルはあの感触を未だ忘れたくないと思っていた。

こんな汚い通りでも日は高くなり、冬物のスーツの下に汗が滲む。いつのまにか止まっていた足を持て余し、立ち竦む姿は、先ほど震えていた尼僧と何一つ変わることがない。それを知っているからこそ、ダリルは自らの感傷を許せなかった。見上げていた建物が鈍く輝くの中から無理やり視線を引き剥がし、再び歩き出す。ホテルに帰ろうと思っていたが、このままもう一度街の東側へ向かおうと今決めた。ニーナ・ウィロックスの家族は、娘の帰りを待ち侘びていることだろう。例え再会したとき、ヤク中になっただろうとも、とんだあばずれになっただろうとも。出来る限りマシな状況のうちに少

女を掬い上げ、それでも愕然とする親から金を筆記取らなければ、今月の家賃が払えない。ゴミ箱を漁る際、明細書のついでに傷んでいない残飯を選別する羽目になるのはごめんだった。そのためには動かなければ。足と頭をフル回転させて。彼は生きている。自らの体が動かなくなること、思考が停止してしまうことをただ恐れていた。

いつかは立ち止まるよう肉が命じ、魂がたゆたいに流れる瞬間が来るのかもしれない。その先にあるのは、自らの罪を償うための時間だと、はつきり彼は理解していた。

Tamed Stallion

白い肌はまるで雪のよう、櫛る栗色の髪も豊かにうねっている。

貞淑な美貌は勿論、その下にくつついている肢体も適正な食生活と日々の満足感によって柔らかに輝いていた。極め付けにぴったりと身体に張り付いた若葉色の絹が、身じろぎにつれさざめき煌く。女神だ、と本気で思った。だがどれだけの幸福の持ち主にも時間は対等に刻まれ、タクシーがくる時間は刻一刻と迫っている。セツとした髪を片手で押さえながら懸命にドレスを引き下ろす姿は、普段ならば十分愛しさを覚えることができるだろう。だが今では、美点と背中合わせになった欠点は逸る心をやみくもに急き立てるばかりだった。焦りが欲情を凌駕した瞬間、ソロはランチの足元に跪いていた。

「不器用だな」

乳房の下でたぐれた布地を引っ張る。無造作な手つきと揶揄の言葉には慣れていたはずのランチも、今回ばかりはむっと唇を引き締める。

「あんまり強く引っ張らないで。これを着て行かないと、おじいさまが悲しむわ」

「はいよ」

こんなにもタイトなドレスなのに、お行儀の良い彼女は下着を身につけていた。一般的なデザイン、裾の部分に繊細なレースがあしらわれている。よれてもないし鼻を近づけても洗濯しすぎた布特有の清潔で酸っぱい匂いはしなかった。薄く柔らかい陰毛が透けて見える。脱いじまえよ、と言ってしまいたかったが、さすがにこれ以上の状況悪化を煽る気にはなれない。鼻先の布一枚隔てた場所にある股間へ目もくれず、ソロは滑稽なくらい慎重な手つきでシルクを下ろしていった。

「爺さんはあのミルトン・イーリング・カンパニーの会長、自分は

絵本のコーディネーターで、料理は最高で可愛くて頭も良くて性格もいいのに、どうしてこんなことが出来ない？」

「私は嫌だって言ったのに」

聡明な内面とは裏腹のぼんやりした表情でブランチは呟く。

「こんな服、恥ずかしい」

「似合ってるのに」

本心からの言葉を真上の胸に捧げる。勿論笑顔も惜しむことは無い。

「ミスター・ミルトンは嫌いだが、彼のセンスに関しては全面的に賛成だ。こんな素晴らしい孫を作り出してくれたことも感謝してる」

「駄目、駄目よ。今日は悪口はなし」

短い黒髪の上に、ギリシャ彫刻よりもずっと繊細な指が降りてくる。

「余計緊張するじゃない」

「忍ぶ愛の辛いところだよな」

含み笑いと共に、遠慮がちな手へ自ら頭を押し付ける。4年の付き合いを経て、箱入り娘はようやくこちない愛撫の手法を身につけ始めていた。それでも残る初心さは、恐らく一生消えないのではなからうか。犬でも褒めるような手つきに浮かぶのは苦笑いだが、心はじんわりと温かさを帯びていった。

広いコンドミニウムの中は音楽の一つも無く、通りの喧騒とも無縁だった。聞こえるとすれば二人の息遣いくらいで、それにしたって自らが息を止めてしまえば、ブランチの穏やかな吐息などあつという間に静寂へ吞まれてしまうだろう。実際ソロは息を詰め、慎重な深い腰骨の出っ張りに取り組んでいた。皺一つ作らないという決意のもと、そつと指で布地を摘み、引っかけたり爪を立てないよう用心深く滑らせて行く。皇かなシルクは確かに極上の手触りだが、この下に隠されているしつとりとした肌の方がよっぽど欲情を煽る

ことは間違いなかった。擦れ合う柔らかさが指の腹を伝って口の中を乾燥させる。くびれた腰から掌を這わせ、悪戯に親指で臍の辺りを撫でてやれば、呻き声と共に髪の毛へ圧力が掛かった。

「時間が無い……」

「まだ15分あるさ」

「でも一回脱いで、また着るなんて絶対無理よ」

珍しい艶を含んだ冗談も、促すために嫌々口にしたものだろう。見上げた瞼は緩く閉じられ、眉根も微かに寄っている。こんな角度からこんな表情。彼女が下着を身につけているという事実には違和感を覚えてしまうほどだった。はつきり言って、ソロは最近ご無沙汰である。ランチの部屋を訪れたのも一カ月半ぶりで、よく発狂しなかったものだと自分でも驚くほどだった。敏腕で鳴らすだけあり、この街の検事はなかなか尻尾を出さない。ゴミ袋の中身は豪華な残飯とマジックで塗りつぶした挙句修復不能なほど切り刻まれた明細書。安い赤外線カメラも遮光カーテンには歯が立たない。業を煮やして退出時に突撃をかましたら壁のような運転手に追い返された。対抗心と好奇心をくべて火力を保っていられたのも三週間まで。結局、ヘッドラインは普段通りの大きさで印刷された。『白い検事、黒い噂、真つ赤な嘘!』少なくとも志だけは高かったと、いつもどおり自らの傷心を慰める。それだけでは虚しくなるばかりだったのだ、結局ここに足を運んでいた。よりにもよって、来ないでくれと二ヶ月も前から忠告されていた日に。連絡の一つも入れなかったことも、確信犯であることも全て見抜いた上で、ランチは悲しげに眼を伏せた。だが追い返すような真似はしなかった。ショーツ以外に唯一身につけたものであるパンプスに落ちたハーゼルグリーンの瞳はいつにも増してけぶりを増している。外出48分前に服を身につけていないなど、全てを律することで自我を保っている彼女にとって許されざるべき出来事だった。

駄目押しをするように畳み掛けるお人よし具合は、介助を受け取っている今も端麗な面差しに憂いを滲ませていた。

「よし、後ろ向いた向いた」

考え事でもしていたらしい。腰を掴んで半回転させれば驚いたような表情を浮かべるが、結局なすすべも無くその形良い尻を男の前へ突きつける形になった。

「な。こんな時に親愛なる隣人がいてよかっただろ？」

「ええ、ごめんなさい」

俯いたときに現れた項に鬱血痕でも残したら、スキャンダルの製造と暴露を一人で行う羽目になる。尻なら見えないから、ちよつと位歯型をつけて大丈夫だろうか。詮無きことを考えながら、尾？骨の終点を煩惱ごと裾で覆う。蟠る布が吸い付くように肌へ重なっていく間、ソロは余計な部分に一切触れなかった。

「ごめんなさい」

落ちてきた吐息の重みに、思わず顔を上げる。こちらの眼を見ることがすらできず、ランチは目の前にある鏡台へ手を伸ばした。

「行きたくない」

落ちて着いた上品さを醸し出すコンドミニアムのインテリア中、唯一口ココの派手さを持つ鏡台は、曾祖母の代から伝わる由緒正しい品だという。よく磨かれたマホガニーの天板に乗っていたのは、保管場所に見合う高級なビロード張りのケースだった。

サテンのクッションへ突き刺さっていたものに、さすがのソロも目をむく。垂れ込む醜聞の代価としてゲイバーのNO.2に迫られた時でも、ここまで脳細胞はダメージを受けはしなかった。

「先週渡されたの。いつでも返してくれて良いからって。でもおじいさまは彼の事をすごく気に入って」

二本指に摘み出されたプラチナの指輪は、恐らくティファニーだろう。ダイヤが一粒埋め込まれただけのシンプルなデザインが、逆に恐慌を掻きたてた。敵は彼女をよく知り、なおかつ尊重している。引きつった唇は幸い見られていない。大きく息を吸い込み一端止

めてから、溜め息に混せて言葉を吐き出す。難儀な交渉の場で余裕ぶっているふりをするとき使う手を、いま使わねばならないことが悲しかった。

「相手は誰だ」

「ジョン・ハグリー……ハグリー・ペットフリーデッドの開発部長」
少し迷ってから付け足された「いい人よ」という表現が、それ以上の意味を持たないと分かっている。それでもソロはスカートの裾を握り締めていた。寄った皺にあわせて、光沢が不快な程めまぐるしく変化する。

「いい人ね」

むき出しの肩が強張ったことで、混乱に怒りと痛みが加わる。

「どうして俺に相談した？」

「いい機会だから」

所在なさげに動いていた爪先はいつの間にか深い毛足に絡め摂られ、動きを止めていた。

「運命なんて信じないけど、今日来てくれたのはある意味、偶然じゃないのかも」

元来それほど口のまわる性質ではないが、今のランチはいつにも増して言葉を選ぶのに躊躇している。次に来る内容を予想しながらも、ソロは辛抱強く耳を傾けた。

「一緒に来て、おじいさまに会って欲しい」

「無茶言っなよ」

すぐさま打ち返された否定に唇が引き結ばれたのは、斜め後ろからでも見る事ができた。

「そんなことしたら勘当どころじゃ済まないぞ」

「別にお金なんか」

「耐えられるのか？」

いつもからかわれるさりげない気品は、彼女に嘘をつくことを許さなかった。正確には嘘と言えないのかも知れない。生まれてこの方経験したことの無い事態など、予想できたほうがおかしいのだから

ら。

返答の代りに、ブランチは閉じたケースを強く握り締めた。

「じゃあ、来年になったら……40になったら来てくれるの？」

「なあ、俺は爺さんがよそに女を囲っててることをすっぱ抜いた男だぞ。旗振って迎えてもらええると思うか」

「卑下しなくてもいいのに」

「してないよ。思慮深いだけで」

「きつともう気付かれてる」

「紳士協定って奴さ」

再び肌の上を通りだした絹の道のりは、心なしか先ほどよりも安易なように思えた。程よい大きさの尻はもう半分近く隠れ、肌寒さに粟立っていた染み一つ無い肌も平穏を取り戻している。

「口にしたが最後、大噴火」

「一体どうするの。ジョニーと結婚を？」

喘ぎは涙の代替物だった。彼女は滅多なことで泣き声など漏らさない。その強さを慈しみたいとソロはいつでも思っていた。だが今は耳が馴れ馴れしい呼称を拾い上げて、もどかしさの中に黒い染みを落とす。

「やけに親しいんだな」

「大学生の同窓生だから」

「ハグリー家ね」

浮かんだ嘲笑を見逃さず、ブランチは頬を紅潮させて振り向いた。静かに燃えて色みを濃くする虹彩に見つめられた途端、今までソロが立っていた場所は途端に均衡を崩し、取り返しのつかない場所へ落下していく。頭では理解しているのに、唇の歪みをとることはどうしても出来なかった。

「今時あるんだな、そんな政略結婚」

「真面目に聞いている？」

「もちろん」

「どうしたらいいの」

「自分で決める。いつでもそうして来たら」

「そうね。好きなようにやらせてくれたわ。クールに気取って」
滅多に無い感情の奔流が、塗られたばかりの紅を湿らせる。

「彼と結婚するって言ったらどうする」

「したいのか」

「答えて」

「重大な選択をあてつけで決めるのは賢くないぞ」

「あてつけじゃないわよ。そういう道もあるってだけで」

「どんな道だ？」

表情筋に浮いた冷たさに引き換え、感情はひたすら臨界点を目指して回り続けている。ただでも寝不足で全身が熱っぽい中、脳みそが浮腫んでいるのではないかと思うほど沸騰し、理性がじわじわと焼き尽くされていく。

「ハグリー夫人になってカンガルーの肉を輸入するのか？ グリー

ンピースのシンパの癖に」

「カンガルーなんか使ってないわ」

「犬の餌なんかみんなカンガルーだよ。オーストラリアまで買い付けに行って三食バーベキュー、アボリジニ雇って女主人か」

「落ち着いてよ。私が聞きたいのは一つだけ」

「いいか、俺は別にカンガルーが嫌いなわけじゃないしおまえがク
ー・クラックス・クランに寄付しようが文句は言わない。そのジ
ヨニー坊やってのも悪い奴じゃないんだろ。だがおまえがそんな
ブラフで人を試すようなことから怒るんだよ。おまえだけはそ
んな下らないことするような人間じゃないって思ってたからだ。奥
ゆかしいのは結構、近年稀に見る素晴らしい美德だな。けど指輪を
受け取るようなお付き合いになるまで何も言わないのはどういう了
見だ」

「だって貴方、忙しいでしょ」

「忙しくても何でも、言えば飛んでくるさ、こんなとんでもない事
態になってるなら。大体今日俺が来なかったら、ずっと黙ってたわ

けだろ。押し切られたらどうするつもりだったんだ。男は怖いんだぞ。ましてやカンガルーを虐殺する奴が女の服一枚剥ぐのに躊躇すると思うか。絶対しないね！ どうしてお前はいつでも自分一人で抱え込もうとするんだ。俺にしなくてもいい、嫌なら友達にでも…

…」

「結婚すればいいの、しちや駄目なの？」

「するな！」

ぐつと息を詰め、大きく吐き出す。その動作を行う1・5秒の間にブランチが浮かべた表情は怒りだった。静かで、ひたむきで、強くて、全てを包み込むような。そしてソロはなぜか、この表情を見た途端、暴れ狂っていた感情が凪いでしまったのをはつきりと感じていた。

静まり返った情動の上にやってきたのは、らしくもない厳粛な喜悦だった。

「分かった」

指輪をケースに戻したブランチは、もうはしたない溜息などつかない。身繕いが完了するまで、いつものように茫洋とした瞳で、鏡に映る自らの顔を蔑んでいる。

「最初から断る気だったもの」

もしかしたら、という疑問はすでに慣れきったもの。別に構わないとソロは思っていた。不幸にして心配が的中したとしても、それは彼女の演技上手を立証する根拠の一つでしかない。第一、まだ操縦桿は彼の手にある。少なくともそう思わせるよう、ブランチは努力を続けている。

「挨拶なんかなくてもいい」

立ち上がったソロの顔を見上げ、ブランチは気弱としか表現できない笑みを浮かべた。

「本当に来ない？」

「やめとく。ジョニー坊やを殴りたくない」

ソロも真似をして微笑んだつもりだったが、結局出来上がったのは似ても似つかない唇の歪みだけだった。

「代わりに奴のホモ疑惑をでっち上げに、今から本社を尋ねるとするよ」

「やめて！」

笑い声と共に胸を押す手に促されるまま数歩離れる。改めて、自ら飾りつけた美しい姿を鑑賞した。フエンディの黄金色パンプス、すらりと伸びた脚。膝丈で慎ましく終わった若葉色のシルクドレス。開いた胸元の眩しさと、控えめな鎖骨。すつとたおやかな首を囲むように流れる栗色の髪。そして羞恥と困惑が典雅に交じり合った微笑み。似合っていないでしょう？　ヘイゼルグリーンの瞳が問いかける。答えはノーだ。何が間違っているともこれだけは言える。無精ひげの伸びた顎に指を当て、ソロは溜息をついた。間違いなく女神じゃないか、ここにいるのは。

掛け時計に視線を走らせれば、タイムリミットを3分過ぎていた。部屋の外にタクシーが待っているのかソロには分からなかった。ましてやランチが気付いているかなど、あずかり知るものではない。ただ眼の前で羽のように瞬く睫毛は、時を超越してしとやかに、優雅に男を招き寄せていた。

彼女の性質からして、遅刻など言語道断。いつそのまま無断欠席に追い込んで、とことん動揺させてやりたい。腹いせ交じりの、決して実現することの無い妄想を楽しみながら、ソロは完璧なルージューを少しでも乱すために自らの唇を重ねた。

swim near the bottom

タイトルロールもクレジットもないことから分かるように、それは素人がデジタルカメラで撮影したフッテージだった。女が画面の真ん中に陣取っている。現代的な顔立ちに、おろしたてとは言え真っ白なスリップなど似合わない。こんがりと黄金色に焼けた手足が違和感を余計に煽っていた。舞台は地下室らしいが、場所は特定できない。家具らしき家具はなく、コンクリートの無機質な薄暗さが彼女の輪郭までも侵食している。暗闇の中目ばかりを異様に光らせ、女はそこに存在していた。唇の動きがあるものの、声は一切聞こえない。カメラの向こうの人物と喋っているのか、視線が正面に定まることは無い。

シーンが切り替わる10秒前に、ふと思い立ったように口を嚙むレンズの向こうをじっと見つめる瞳は、まるで知性を感じさせない動きでぱちくりと瞬く。ここで初めて彼女の眼が、青か、それらしい色であることが分かるのだ。再びカメラと対峙した女は、取って付けたかのように手を振る。笑みも白々しい。だが、それなりに美しい。ぷつんと映像は途切れ、数秒の闇。

場面は変わり、病院の処置室らしき場所が映し出される。断言が出来ないのは、部屋にある全てのものが新聞紙で覆われているからだ。壁、窓、医療機器らしい大きな塊。床はおるか、診察台すらもよくみれば黄ばんだ紙を敷き詰めてある。個性という個性を徹底的に排除した室内で唯一剥き身の存在であるのは、その上に横たわった女の身体だけだった。日焼けの甲斐なく右腕は青白く、床に向かってだらりと垂れ下がっていた。勿論、変化しているのは腕の肉だけではなかった。真上から当てられたライトの光が強すぎるせいもあるだろう。だが切り裂かれたスリップから垣間見える肉体は、病んでいるかその先に進んでしまった肉体特有の浮腫みに冒されて

いた。

画面の外から現れたのは、フランケンシュタイン博士かナチスのマッドサイエンティストといったところ。体格で、男だということに分かる。古臭い手術衣と大きなマスク、白いキャップまで被っているお陰で顔は分らない。ゴム手袋をぱちんと弾く茶目っ気とは裏腹に、アルミのトレーに並べてあるメスを掴んだ手は一切躊躇が無かった。仕事が始まる前に、カメラは女の身体を上から下にパンしていく。これまた時代掛かった麻酔吸入のマスクのせいで、女の顔は殆ど覆われていた。ぼかしも一切入らず、濡れたような髪から爪先までを辿る。弛緩した肉体。相変わらず音は無い。

まず医師は、一見何の症状も窺えない女の左手に着目した。ズームされた薬指の根元にメスを当て、ソーセージでも切るかのようにごしごしと動かす。血はにじみ出るように流れるだけだったがその量は多く、新聞紙を赤く染めていく。骨に達した時は力を込め、後はそのまま押し切るように刃を滑らせれば、悪趣味な黄色のマニキュアを施した指がころりと新聞紙の上に転がった。切り口は見えないが、はみ出した筋組織と脂肪が血にまみれ、光の下でぬめっているのがはつきりと分かった。乾いた紙数度の激しい手振れはするものの、レンズは五本の指全てが切り落とされるまで辛抱強くその場に留まっていた。

レンズが引くにつれ、医師がメスを捨てていたことが判明する。彼が代わりに取り出したのは小型のチェンソーだった。機体を股に挟み、ハンドルを何度も引つ張る。エンジンの回転は、局地的な照明から外れた部分に立っているにも関わらずしつかりと捉えられ、巡る刃の輝きがダイヤモンドのようにちかちかと光った。

準備が整うと、男は再び患者に向き直った。一度機械の重みでよ

るけたのはご愛嬌だ。獲物を狙うジェイソンよろしくチェインソーを高々と抱え上げる。ライトと同じ位置にまで持ち上げられた回転刃の速度は、取り返しのつかない速度までヒートアップしていた。撮影者が走り、医師の正面に回る。マスクとキャップの隙間から見える瞳は、表情など一切窺えない。数秒仁王立ちの姿勢で動きを止めた後、唐突に腕が振り下ろされ、唸る刃が女の胸に迫った。

「オーケー、もういい」

男が手を振ったのにあわせ、レスはマウスをクリックした。チェインソーはちょうど肉に食い込むか食い込まないかの決定的瞬間。ぶれすぎて何が何やらさっぱり分からない。

「どうかな」

「どうもこうも、最低だな」

「頼むよ、ラビー」

ラビーと呼ばれた男は答えず、撫で付けていた黒髪を指で梳いている。近寄りがたい程強面の彼の造形中、眼が覚めるような空色の瞳だけは、レスが彼と出会った時と同じく曇るということを知らなかった。混じりけの無さで考えれば間違いなく無垢と言える眼差しは、外界の全てを弾き返す。自らが放つ狂気によって。

最低限の礼儀こそ弁えているが、一回り以上年嵩の危険な目をした男へ使うには幾分親密すぎる口調と共に、レスは身を乗り出した。「もうちょっと見てくれたら分かると思うけど、ここから先が盛り上がるんだ」

「女が死んでるって分かった時点で盛り下がっちゃったよ」

ウェイトレスがコーヒーを継ぎ足しに来る。暇なのだろう。客は数人、絶対に隣り合わないよう席を取り、思い思いに午後の時間をやり過ごそうとしている。生産的行動に携わっているのは自分たち

ただだと、胸を張ってレスは答えることが出来た。広げたラップトップを覗き込むだけの簡単な作戦会議。ポットを抱えた年増女をラビーは手だけで追い返そうとするが、一旦止めてレスの顔をじろりと見遣る。好意に甘えてカップを差し出せば、無表情の女は乱暴だがつきつちり9分目までまずいコーヒーを注いでくれた。

「分かった？」

大きな身体を丸めるようにして画面を覗き込むしおらしさも、長年の付き合いでは全く通用しない。ラビーは頷いて、半分近く残っている自らのマグを指で弾いた。

「どこから持ってきたか知らんが、そんな古い奴じゃないな」

「多分6時間は経ってない」

混沌とした静止像の中で、辛うじて分かる首の辺りを指でなぞる。「男に捨てられて薬を飲んだって。家賃半年分滞納してたから、身体で払ってもらったってこと」

「マニアは詳しいからな。浮腫みとかですぐ勘付く」

同じように画面からはみ出しかけた手を指し示す。明らかにライセンスを偽造している機器はモニターも安っぽく、ちよつと爪で押されただけで不快な色に滲んだ。

「あと、生きてる奴の指を落としたら、もっと派手に血が飛び散る。いつそのこと、死んでるのを前提に撮れば良かったんだ。何なんだ、最初のところ」

じろりとカウンター席を目だけで示す。

「ポルノの自己紹介みたいだ」

明らかに聞こえているはずなのに、スリッパ姿で下手くそな代役を務めていた女はこちらを見向きもしない。だらしく肘を付きアイスクリームでも食っているのだろう。熱心に日焼け剤を用いているだけあり、仕事用のカットオフジーンズから伸びた脚はむらなくオリーブ色だった。確かにボディ・ダブルとしては不向きだろう。哀れな家賃滞納者はもつと痩せっぽちだったし、まるで蚕のように色が白かった。

「今時死体や殺しの場面なんか、ユーチューブで幾らでも見られるもつと何か、あつと驚くものがないとな……ありきたりすぎる」

「誰かさんはありきたりで興奮するんだろ」

回転椅子から突き出された尻から視線を剥がし、レスは吐き捨てた。窓の方に視線を逃がすと、曇ったガラスの向こう側で赤い魚が無気力に揺れていた。群青の空と白けた通りの間、檸檬色の日差しの中を、レッドスナッパー・ダイニングの文字と共にたゆたっている。看板はその職務をまともに果たしていなかった。手招いても誰も来ない。夜になったところで、彼が輝くことはできない。心無い酔っ払いを始めとする人生を真面目に生きていない人間にネオンを叩き割られたせいで、輪郭すら今にも風化してしまいそうだった。

「女が気に入らないなら」

強い風がブリキの板をもみくちやにする。その光景から、レスはいつまで経っても目を離せないでいた。

「親父でも呼べってか」

拗ねた子供以外のなにものでもない口調に、ラビーはいつもの如く呆れて肩を竦めるしかなかった。

「来ないだろ。一本の映画に1000万ドル貰ってる人間が。こんなスナッフ映画に」

「スナッフじゃない。誰も殺してないんだ」

ふうつとカフェイン臭い息を吐き出したレスも、自らの冗談にうんざりしていた。

「分かったよ。最初の部分は全部切る。でもそうになると、再生時間が3分の2位になるぜ」

「かまやしないよ。余計なもんはないほうが売れる」

ラビーはもう、椅子の背に掛けていたスプリングコートを取り上げていた。

「どうせあんなところ、あっても早送りするんだから」

引き抜かれたUSBメモリーをポケットに落とし、伝票を掴むのはまさしくお茶を濁すため。文句を付けつつも、ラッシュ映像は今晚彼の弟に供されるのだらう。引きとめようとしたレスは、すんでのところで言葉を飲み込んだ。用事など何一つない。そう、レスはこれから、何一つ予定がなかった。動画の編集はまた明日。すっかり慢心してデジタルカメラを友人に返してしまったのが運のつき。かといって自分用の物を買ひ揃えることだけは、プライドが許さなかった。

「そういや、このチェーンソー振り回してる奴」

ふと思いついたのか、ベルのついたドアを潜ろうとしたラビーが足を止めた。顔を跳ね上げたレスの眼をまじまじと見つめ、コートのポケットを叩いてみせる。

「ドク？」

「ああ」

自分でも分かっている未練がましさを宥め、何気ない顔を作るためにコーヒーを一口。ついさっきまで舌を火傷しそうな程だったのに、もうカップの中身は味気なく冷えていた。

「死ぬほど嫌がってたけど、あいつも結局がめついだろ。弟の病院とか。あの後、自分の膝切り落としそうになってたくらいで」

「そうか」

まるで自然な口ぶりで、大変だな、と呟く。

「膝は無事だったのか？」

「ちよつと掠った位。血は出てたけど。映ってたんじゃないか」

「そこところは残しとけよ。目玉になるかも」

バナナサンデーを迎え入れるべく身を屈めた女の胸を覗き込んでから、ラビーはレスの胸を指差して見せた。

「完成したらまた連絡くれ」

ちりと音が鳴って、店の中に沈黙が戻ってくる。どうせタダなのだ。本当はもう一杯位コーヒーを飲んでいてもいいのだが、今までの物騒な会話などなかったことにされている空間にこのまま居

座るのが嫌で、結局レスはラップトップを鞆に戻した。早く出るのは得策ではないと分かっているにもかかわらず。何をしたら良いか、本当に分からなかった。自らの太腿に切りつけた間抜けなマッド・サイエンティストのところにも行つて時間を潰すくらいしか思い浮かばない。金銭に汚いのは事実だが、本当の彼はヘル・メンゲレとは似ても似つかない性格だ。飲み損ねたコーヒーくらいは出してくれるだろう。

立ち上がった気配を感じたのか、意地汚くスプーンを嘗め回していたクリスタが声を上げた。振り向きもしない。

「お父さん、出てくれるんじゃない？」

一瞬で場が凍りつくような睨みを利かせてもどこ吹く風。クリームを味わう顔は、ささやかな憂さ晴らしだろう。アイスクリームはオーガズムのような恍惚を呼ぶが、その逆は滅多にないことを女は経験上良く心得ている。

「この前テレビで掛かった映画……『ハウリング・マッド』だったけ？ あれですっごいサイコな役やってたじゃん。受けてくれるって」

「知らねえよ」

一緒に見ていたことを知りながら、それ以上はことを荒立てる気はないのか、黙ってまたスプーンでアイスを掬う。皿の中に垂れてしまいそうな髪を掻き上げ、わざと澄ました顔を作つて見せるのは明らかに機嫌が悪い証。凶星をさされて余程腹に据えかねたらしい。もちろんレスが否定しなかったことにも。

『ハウリング・マッド』の女を吊るして殺す役どころか、世界を救う銀行員の役も、アメリカを横断する刑事の役も、彼は台詞をそらんじることが出来るほど繰り返し見ていた。幾つかの台詞はそらんじて言えるほど。小さい頃からテレビの前で賞賛し、映画館で憧憬を抱いた勇ましい姿。焦げ茶色の豊かな髪と同じ色をした凜々し

い瞳。がっしりと逞しい体躯。爽やかな声。

彼がレスの顔すら知らなくても、レスは彼のことをよく知っていた。まるで身近に暮らしていたかのように。

「あ、それともあんたが出てもいいんじゃない。後姿だったら絶対分かんないよ」

よつぽど手が飛びそうになったが、ぐっと息を飲み込むことで耐えた。視界の隅で、壊れた魚の看板が躍る。畳み掛けるように続く言葉に押されるよう、揺れはますますひどくなるばかり。今にも外れて飛んでいきそうだった。

「中途半端にしてないでさ。トラック運転手だけでも食べていけるのに」

「はつきり言えよ。ギャングの情婦の方がいいって？」

「かもね。でも無理よ。どうせなる勇氣なんかないでしょ」

言い返すことも出来ず、そのまま乱暴にドアを押し開く。火照った耳の奥ではベルの音も聞こえない。

風は強かった。魚が振り回されるのも仕方がない。だが成す術もなく風に煽られている看板の姿は見ていて腹が立つし、先ほどから集中力を散々妨げてくれていた。いい加減、修理にでも出せばいい。だがレスがこの店へ出入りするようになって以来、結局ネオンは割れたまま。昼間も特に目立つわけでもなく、新規の客一人を呼び込むことも出来ないでいる。こんな下町のダイナーに客が来るはずがない。それでも虚しく、どぶ臭い空気の中を泳いでいる。

錆びた金属の擦れ合う音が癪に障る。いつそのこと完膚なきまでに叩き割ってやろうとすら思った。だがそんなことをして何になると言っのか。かっとう頭に上った血が、冷たい秋風に嘲笑されて一瞬にして熱を下げる。

こうなったら是が非でも今日中に編集を終わらせてしまわねばならない。駆られた鬱屈に促されるよう、レスは道を駆け出していた。

w a n t w i p e d o w n u n d e r o v e r l a p

まずその生い立ちからして、レスは不幸を絵に描いたような青年だった。売春と教会が経営する老人ホームの掃除が8対2という割合で生計を立てていた彼の母親は、産婆に抱かれた一人息子を一瞥して一言。「どうして彼が結婚する前に生まれてこなかったのかしら」。悪役めいた台詞を吐く女の常で彼女は馬鹿ではなく、皮肉と諦観を込めて赤ん坊の名前をレスリー・クレザン・ミッチェルと名づけた。一ダン・ミッチェルのなり損ない《レス・ザン・ミッチェル》。

あのダンカン・ミッチェル！ テレビドラマ「L・A・ミッドナイト」でロスのタフでイカした刑事トリクシー・ブラッドを演じたミッチェルが、ハリウッドからもニューヨークからも近いとは言えないティンゼルタウンでわざわざ子種を落としていくはずがない。そうも言いきれないのが悲しいところで、生涯に一度だけ、彼はこの街にある施設へ慰問に訪れていた。そこで働いていたのがストロベリーブロードでブルーの眼を持つ、比較的やつれていない一人の女。子供を宿したと知る前から彼女は、トリクシー・ブラッドと一夜を共にしたのだと言いふらし、夜に腕を組んで歩いている姿を目撃した同僚の清掃夫もいた。70を過ぎた彼の眼は極端に悪かったため、誰も信じる者はいなかったが。

それは彼女が何ヶ月か後にわざとらしくトイレへ駆け込んでも変わらなかった。変わるわけもなかった。仕事の仕事だし、彼女は俳優がやってきた1ヵ月後に、いかがわしい組合員の男と同棲を開始している。何よりも様々な慈善団体への寄付を怠らず、既にスター

レットとの過ちを認め、教会行きのカウントダウンを始めているような男の中の男、ダン・ミツチエルが、この際一人や二人の認知を拒むわけがないことを皆知っていた。

その点について彼女はこう釈明している。取引があつたのだ、とある日厳ついロシア人風のマネージャーがやってきて、彼女に養育費という名目の口止め料を払ったのだと。その時無知だった彼女は非常に損な　曰く、尊厳を踏みにじるような少額の　契約を結び、一括で払われた数万ドルとこれ以上の金を求めてビバリーヒルズを練り歩いたりしないという誓約書のみが手元に残った。その経験に基づいてえせ談合屋なぞと付き合い始めたらしいのだが、子供が産まれた途端、少なくともこの男を共犯者と呼ぶのは酷だと人々は認めざるを得なかった。談合屋はブロンドと涼やかなグリーンの眼を持つ細身の男。息子は最初こそ柔らかな金髪を保っていたが、2歳の誕生日には見事な栗毛へ変身し、そのことを予言するかのように瞳は最初からくりくりとしたチョコレート色だったのだから。そう、あのトリック・ブラッドのように。

レスにとって更に不幸だったことは、彼が生まれてから成人するまでの間に、ダン・ミツチエルが穏やかだが目に見えるような衰退の道を辿ったことである。レスが学校に上がってすぐまでは、トリック・ブラッドもまだテレビの中で銃を乱射していたし、華やかなゴシップにも事欠かなかった。生活保護の関係で叔父と呼んでいた義父にも、粗末な身なりと母の職業を馬鹿にする級友にも当たり構わず「僕の父さんはトリックだ」と喚き散らした関係上、彼は結局自らの出自が特別でなくともそこに生まれた限り当然辿っていた道しか歩むことができなかった。同じアパートに住む売春婦の子供た

ちとばかり遊び、常に自分を無視する両親の争いを聞いて眠りにつく。プライドさえなければ、彼がもう少しまともな人生を歩んでいたらはずだったことは、周りの誰もが認めるところだった。手足が伸びるにつれ、レスの容貌は際立っているといわないまでも整っていることが明らかになっていった。6フィート3インチもある引き締まった体つき、色の濃い栗毛。少し淋しげな眼差し。その顔立ちはもとより、少し猫背気味の立ち姿や長い肢体を持て余す様子が夢の父親そっくりと来ては。これに関してはテレビや映画を録画し真似を繰り返した賜物なので反則と言えばそうなのだが、頭の悪い女の子たちは簡単に引つかかってしまった。もう少しまともならば、と分別のある　彼が本当に付き合いたいと願っていた　ローティーンの少女たちすら嘆いたものだ。プレップ・スクールのブレザーを着てデイトナに寄りかかっていたら、GQのカバーに載っていてもおかしくないのに。実態はただのワル。しかもそんな権利などありはしないのに、しょっちゅう侮辱を感じている。

そして劇的展開。レスが17歳という一番多感な年齢の頃、くだらないゴシップ誌の間を小さな小さな衝撃が駆け抜けた。トリック・ブラッド、不倫後再婚。テレビシリーズが終わった後も引き続き映画スターとして活躍し、プライベートでは子供を肩車してドジャースの試合に連れて行くようなミスター・ナイスガイがなぜ？　貪り読んだ雑誌で分かったのは、相手がレスより二つ年上であることと、ナイスガイは再び男らしく責任を取って子供を認知し、メキシコで盛大な結婚式を挙げたということくらい。星の数ほどある醜聞の中にあっけなく埋もれてしまうような出来事も、彼を含めほんの数人だけは執念深く覚えていた。

「それでお前は、全てを俺のせいだって言いたいんだな？」

スラックス越しに包帯の縁をなぞりながら、ドクター・キルケアは黒い目を瞬かせた。ただでも痩せ型だったのが不摂生な生活でげっそりとやつれ、童顔をようやく実年齢と見合うものに変えている。血色の悪い顔色がそれでも黄み掛かっているのは流れる血のせいだった。父親の顔を知らないという点を含め、彼は医者と言う枠組みを超えてレスの悩みにびったりと寄り添う資格を有している。違うところと言えば、彼の母親は息子に夢を捨てるよう促し、自らの父親をジャッキー・チェンやサニー・チバであると仮定することを許さなかったくらいだ。

「何だっけ」

「思い出せ」

汚いグラスの中身を煽り、レスは首を振る。ただでも苦いトニックウォーターにキニーネの0.5グラム錠をスプーンで砕き、申し訳程度にジンを垂らした液体は、唇を真横にひん曲げたくなるほどの強烈な苦味を持っていた。飲みすぎると耳鳴りがするのは玉に瑕だが、それは恐らくホストの意思表示。さっさと帰れと言いたいのだろう。同じものを啜るキルケアの眼下にはうつすらと隈が浮いていた。

診療所のドアを叩いた時、ちょうど帰りがけの患者とすれ違っていた。近辺では見かけない顔だった。少なくとも娼婦ではないらしい。学生だろうがコルガルだろうが、ここを尋ねる女に共通する顔色の悪さと、鼻の奥を無理に拡張するようなヨードチンキの匂いを漂わせていては、違いなどどうでも良くなってくる。

診察室の主が洗うキーラン鉗子の輪になった先端には、まだ先ほどの女の肉体と彼女から引き剥がされた生命の一部が残っていた。思い切り顔を顰めたら、同じような顔を返される。小学校へ入る前

どちらかが発明した遊びの一つは、再開されたのではない。今でも細々と継続しているというだけの話だった。

「そんなに傷つくことか？ おまえのお袋はとんだ淫乱だ、とか」「違う」

「じゃあ……ビッチ？」

「おまえのお袋がだろ」

呂律が怪しいのは疲労のせいかな薬の副作用か。本来渡すはずのキニーネが余ったということは、患者は冷静かつ迅速にここを訪れ、術式は滞りなく施されたということなのだろう。普段自己処方など行わないキルケアが憂鬱症の発作を宥めきれなくなるほど何の障害もなく。女性的な唇を白衣の袖で拭い、見つめる目は笑みを刻んでいるのに淀んでいた。

「ああ。『結局どっちに似たって、ろくでなしには変わらないじゃないか』って」

「覚えてるんだな、やつぱり」

しんねり呟いた積年の非難など、鎮静された意識には痛くも痒くもないらしい。湧き出る唾液を飲み込み、レスは今が好機とばかり言葉を吐き出していった。

「言い返すことを考えてるうちにお前は大学行って軍隊だろ」

「そう、まだ奨学金も返してない」

デスクの上で山積みになった紙の束へ手を伸ばした弾みに、チェッカーのボードが床に落ちる。固い音がいつもよりも鋭敏化され、頭の芯に直接響いた。

「もう一年半は滞納してる。いい加減督促が来るかも」

「とにかく俺は傷ついたんだ」

「純情」

ふっと似非笑い、キルケアは手にした封筒の縁を人差し指でなぞった。

「俺が言いたかったのは、海には魚なんて山ほどいるってことで。魚も悪くない。無理に鮫になる必要なんてない」

「鮫って魚だろ」

「知らんよ」

「海軍の癖に」

染み渡った苦さに声が擦れはじめる。溜め息を吐き出す事すら忌みたくなるほど。鬱々とした表情を隠しもしない様子に、いい加減キルケアも何かに勘付いたらしい。右眉と口の端を同時に吊り上げる。

「珍しいな。こんなにしつこく絡んで来るなんて」

「買いかぶりさ」

レスは唸った。

「何もかも上手く行かないんだ。お前があんなこと言って以来」

「訂正するよ」

肩を竦める動作はあまりにもそつがなく、謝罪の意など当たり前だか当たらない。

「ダン・ミツチエルは何事もなく復活した。お前がついてないとしたら、それは血筋じゃなくて育ちのせいだ」

「努力はした」

嘆きの言葉と裏腹に声音は泣きも怒りも表現しない。あれほど憎んでいた義父の伝で長距離トラックを運転することになった日と同じだった。希望など最初からありはしないなどは、まるで思ってもいない顔でレスは怒る。

「何でかな。ここまで上手く行かないなんて」

目を擦っても歪みが取れない。

「おかしい。こんなに上手く行かないなんて」

「ところで、金の方はどうなった」

招かれざる訪問客にも価値はある。一番聞きたかった疑問を口にすることができ、キルケアの気分は少しだけ上向き加減になったらしかった。一箇所に留まった瞳は正気で、唇には柔らかいカーブを刻んでいる。

「傷害手当くらいは出そうか？」

「まだ貰ってない」

頭を振り振りレスは答えた。やってきたのは眩暈というより眠気で、強制的に引き出された鎮静が体温を末端から上げていく。

「編集をしてから。頭を全部切れって」

「本番のみってこと？」

「ああ……クリスタの」

グラスを掴む指が滑りそうになり、テーブルに戻す。

「現代人は、人が死ぬのなんか見飽きてるんだと」

「言えてる」

指の腹に残った雫が熱を孕んでいく。思い出せないということは、その必要がないこと。何かで目にした台詞が蛍光色で頭の中を飛び回っている。

「なあ」

名前を呼べば、キルケアは頼杖の上でぼんやりと頷いた。ハイスクール位の頃、まだ不安を不安と認識していなかった頃、不定形の鬱屈を同じく流れに乗って消えていくマリファナの煙に混ぜ込んだことを思い出した。このままマスを搔いたら最高に良いのだと噂を信じ込み、レンタルビデオ屋で選んだ『マルコビッチの穴』(Beijing John Malkovich)。ラリったままの自流は自由だが、ビデオを借りるのはいけない。タイトルと裏腹に全く又ケず、結局二人して一言も喋らずテレビを睨んでいるうちに酩酊は覚めた。

あの時感じた超常的非現実感を、レスは久しぶりに噛み締めていた。デスクの上でチェッカーのボードを弄ぶ手が人に接続されていると思えないような不器用さで動いていることが、余計に感覚を煽り立てる。違和感は空白に繋がっていた。違うと叫んでも、埋めるものは何一つ見つからない。

「別に……怒ってるわけじゃないんだ」

椅子からずり落ちそうになった瞬間こそ流石に靄も晴れたものの、結局危機感を覚えた身体は本能の命ずるまま立ち上がっていた。左右へ揺れるような歩みで、先程まで女が寝ていたのであるう場所にたどり着く。数歩の距離はまるでないようにも、2万マイル近くあるようにも感じられた。背後から声を掛けられた気がしたが、鼓膜は自らが放つ以外の振動を一切拒絶していた。

明らかに柔らかさの足りない診察台に頬をぶつけ、膝はでこばこしたりノリウムの感触に安堵する。変な形にねじれたままの唇で、レスは自分だけがはつきりと分かる不明瞭さで呻いた。

「ただ気掛か……りで。あれ……ちゃんと抜け、る……か……」

何言ってるんだ、と、膜で覆われたかのような声が聞こえた。その口調がまるで、子供の愚痴を聞く母親のようなのだ。ぞつとしてレスは逃げるように寝椅子型の台へ這い上がるうとした。だがもかく爪が引つ搔いたものが安っぽいビニールだと知り、いつものように諦める。祈りでも捧げるように突っ伏したまま、引きずり込まれていく意識の中で散々逡巡する。このままではまずい。癲癇を起こされたらたまらない。こんなところで寝ちゃいけない。怒られる。逃げないと。しっかりしないと。相反しているように見えて結局裏表でしかない命令は、フィルムの切れた映写機から映し出される映像の如く、白抜きに溶け込んでいく。情けなかった。怖かった。だが結局、どうでもいいという感情に流されて、全て飲み込まれていく。

父さん、と口の中で呟いて目を閉じたときには、先など何も見えなかった。あるのは暗闇だったが、それを喜ぶべきかそうでないのか、レスは遂に考えることなく意識を手放した。

f r o m d u s k

その見かけに違わず、フロリーはどうにもがさつな性格だった。

あるときスモークサーモンのマリネを作っている最中、切れ味の悪い包丁に襲い掛かれ人差し指の皮は一刀両断。指を啜えて甘えた唸り声を上げれば、だらしくソファに身を預けていたスリムは一瞬だがアメフトの中継から意識をそらした。

「いやんなる！」

第二関節から溢れる血が、唾液に混じって嘆きと共に口から零れそうになる。その様をじっと、あの新緑色の瞳で見つめられると、それだけでフロリーは二の腕の産毛がちりちりと焦げるのを感じた。だが官能も一瞬だけ。すぐさまテレビに向き直ったスリムは、夕飯を待ちきれず開けていたバドワイザーの缶を取り上げた。中の液体からすっきり気が抜けていると知り、ふんと一つ鼻を鳴らす。

「あの赤んぼ殺しに診てもらえよ」

すげない言葉に返す嫌味も見つけられず、既に血の止まっている指をしゃぶりながらキッチンに戻るのがお決まりのパターン。自業自得だとは分かっているのだが、彼女はそれでもあからさまに拗ねた顔で唇を尖らせるのだった。

スリムと呼ばれる男にフロリーが出会ったのは数年前のこと。悪名高い『ナイジェル・ランチ』のちょうどライトが当たらない位置に陣取っていた彼へ、ブラジャーを投げつけたのがその始まり。特に狙っていたわけではない。ただ、少し悔しかったのは確かだった。こんなにも豊満な肉体が眼の前でくねっているのに、見向きもせずバーボンを煽っていられるなんて。ホモか不感症か、それとも他のことに集中しているか。飛び込んできた黒い布切れを見下ろす目つきから、第三候補だとすぐに気がついた。途切れた集中力を繋ぎな

おしながら持ち上げられた顔を見たとき、フロリーは危うくポールに擦り付ける腰の動きを止めてしまいそうになった。獲物を狙う獣で表現してしまうことができたならどれほど楽だっただろう。スリムはぎらつく目をじっと舞台に注ぎ、それからにやりと笑みを浮かべた。閃いた光の得体のなさ、その形に変化した理由がさっぱり読み取れない唇の歪み。自分を見て笑っているのではないと、瞬時に気付いた。逃げたほうがいいのかもかもしれないと。それなのに彼女はその夜自らのベッドに彼を招き入れたし、気付けば部屋に来ることを許している。

確かに、ボーイフレンドとしてキープしておく分には悪い男ではない。品はないものの冗談は言えるし、世界で一番おいしいフレンチトーストを作ることができる。気分次第では職場で絡む酔っ払いを殴ってくれもした。退役後も頭がジャーヘッドなままの男に加減や良識なんて言葉は最初から求めていないので気にならない。そもそも彼に増して奪ったり傷つけたりすることしか知らない男など世の中に山といるのだ。またこれは一番重要なことだが、フロリーは少々手荒く扱われた方が燃える性質であると、自らの性向を正確に把握していたのである。

今日も今日とて相手にパンティを履く暇すら与えず、スリムは自らが乱暴に叩いたドアから反響が返ってこないうちにドアを開く。何とか布を引き上げるところまでは成功したが違和感は拭えない。全てを無視して、フロリーは逞しい身体に飛び込んでいた。梵字のタトゥーが刻まれた太い腕は、弾む肉体を簡単に受け止める。パーカーに包まれた上半身が僅かに逸らされた瞬間、ぱりぱりと小さな音が二人の間に滑り込む。はっとして、足元に眼をやった。ワークブ

「ッが、玄関先に飾ってあった松ぼつくりを踏み潰している。

「あーあ。もう」

「ああ？」

身体を離し、今日初めてまともに見た顔には、興奮の欠片も見当たらなかった。ぽんと脛を蹴飛ばされて、ようやく障害物に気付いたらしい。持ち上げられた靴底の下からすばやく攫った木の実を、フロリーは男の鼻先にぶら下げて見せた。白い絵の具が塗られたそれは見事にひしゃげ、かさが好き勝手な方向に広がっている。

「何だそりゃ」

「もうすぐクリスマスでしょ。オーナメント」

「今何月だと思ってんだ。この前ハロウィンだって騒いでたばかりだろ」

「とつくに終わったわよ。もう世界はジングルベル」

ふんふんと鼻歌で奏でて見せれば、それを掻き消すように噴出された鼻息。女を小馬鹿にしてみせるとき、彼の丸い顔は猫のようくしゃっと真ん中に寄って、不思議と愛嬌があった。

「どうして女つてのはそう、お祭り騒ぎが好きなんだか」

「せつかく可愛くできたのに」

言っでは見るものの、無念さは全くといって良いほど感じない。部屋の外に向かって投げつければ、早すぎた聖夜の余興は小便臭い階段の上を数段飛ばしで跳ね、見えなくなった。

「クリスマスツリー買ってよ」

「どんなの」

抱えていた袋を押し付け、部屋の主よりも先にソファへ腰を落とす。彼のアパートを訪れたことはないが、家主がケーブルテレビに加入していないことは、ここに来るたびテレビのチャンネルを回したがることからすぐに察せた。キッチンに引っ込み、フロリーは熱狂的な解説者にも負けない声を張り上げた。

「白いプラスチックの奴で、紫のライトがついてるの」

「ホモくせえな」

「見たことないからよ」

袋の中から出てきたシリアルは先日買ってきてくれと頼んだもの。真新しいオートブランの香ばしい匂いを嗅いで見たくなったが、我慢して封を切らないまま棚に押し込む。

「クリスタが、って友だちなんだけど。去年彼氏に買ってもらったの。すごくお洒落なんだから」

「へえ」

クラッカーとクアーズの缶を持っていこうと冷蔵庫のドアを開めたところで気付き、慌ててバドワイザーと取り替える。幸いスリムの意識は駆け出したクォーターバックに向いていた。

「買ってくれる？」

「ああ」

生返事だったが、覚えてさえいれば彼が買ってきてくれることをフロリーは知っていた。一体何の仕事をしているかは定かでなかったが、ともかくスリムは最低限の金を持っている。少なくとも女から生活費を差のような真似をしでかさない程度には。これは友好的関係を築くうえで非常に重要なことだった。殴られたり怒鳴られたりは我慢できても、金を取られては生活ができない。職場から前借ができなくなつた途端捨てられたのならまだ良いほうで、ひどいときは部屋の前で待ち伏せされ、消費者金融へ引っ立てていかれたことも幾度かある。財産に手をつけないということは、自由を保障するということだ。スリムは彼女を縛ろうとしなかった。他の男の前で乳房を晒そうが、訳の分からないものを欲しがろうが、馬鹿にすれども否定はしない。今までの男に比べれば、神か仏かとは言わな いまでも、非常に良い待遇であることは間違いなかった。

彼の隣に腰掛け、持ち込んだクラッカーを齧る。耳元で響く、プルタブを押しのけたガスの音が心地よい。はつきり言ってアメフトになど興味はなかったし、スリムは説明の一つもしてくれなかった

が、この時間をフロリーはとても大切にしていた。セックスは楽しい。だがこうして何をするでもなく二人でいるときに感じるこそばゆさは、ある意味オーガズムを凌駕していた。自分の身体が彼一人だけのものになったような気がする。

引き締まった腹筋へ服越しに触れていたら、ふと指先に布ではない柔らかさが引つかかる。ごわつくそれをつつくと、スリムはソファの背凭れに引っ掛けていた肘でフロリーの頭を軽く小突いた。

「いてえよ」

「何これ」

顔に掛かったブルネットを掻きあげ、フロリーはもう一度違和感のあつた場所を撫でた。

「ねえ」

「大したことない」

頭頂部へもう一発お見舞いされる前に、手はパーカーの裾を捲り上げていた。オリーブ色の肌に不釣り合いな真っ白いガーゼ。中心辺りにぽつりと針の先ほどの血が滲んでいる。脇腹に走った縫合痕を含め、彼の身体に走る無数の傷は見慣れていたし、未だ増え続けていることも知っている。だがここまであからさまに血の匂いをさせているものは初めてで、思わずフロリーは息を詰めた。

「これ」

「トチっただけだって」

特に興味を持つこともなく、何事もなかったかのような顔でテレビに戻る。

「おまえには関係ねえよ」

そのまま彼女黙り込んでしまったから、これで話は終わったと思つたのだろつ。だからもう一度にじるよう押し付けられた爪が、ざらざらしたガーゼ越しに縫目のおうとつを辿ったとき、予期せぬ痛

みに呻いたのだ。喉が震えた拍子に吹き上がったアルコールは、鼻腔にまで迫ったらしかった。

「ぶっ殺すぞ！」

むせ返る動きに合わせて痙攣する腹筋の上に指先を這わせたまま、フロリーは煮えくり返る怒りに身を硬直させていた。

「ひどい」

レイプ魔のような視線に晒されても、ミルクチョコレートの色をした瞳は一切怯まなかった。

「あいつのところに行っただんでしょ」

「何だよ？」

まだ箆った咳を続けながらも、とりあえず汚れた口元だけは乱暴に手の甲で拭う。

「ったく」

「この怪我。治療してもらいにあいつのところに」

早口でそれだけ吐き出した唇は、整った前歯に噛み締められて徐々に赤黒く変わる。とりあえず腹から相手の掌を払い落とすことに成功したスリムは、しかめた眉の下から放つ眼光を少しだけ緩めた。

「ああ」

怒りの温度は変わらないが、紛れ込んだ不純物のお陰で勢いは少しだけ下火になったらしい。その機に乗じて、フロリーはまた声を張り上げた。自分でも、煮えたぎる衝動の原因がさっぱり分らない。論理的思考を放棄した脳の末端で爆ぜた火花が、視神経を伝って眼球全体に広がる。

「仲悪いんですよ、どうしてそんな」

「そりゃあ、あいつは医者だからな」

見下ろす瞳に膜が張ったのを見た瞬間、スリムの声はあっという間にその熱量を失った。

「いくら罰当たりでも」

「普通に」

鼻の奥がかつと燃え上がり、ついで湿り気を帯び始める。幸い鼻

水が垂れるよりも早く涙が溢れ出し、顔中をとめどなく濡らし始めたが。

「普通に！ 市民病院へ行けばいいのに！」

「一番近かつたんだよ。それに」

汗すら引いた缶の底がローテールにぶつかる。こん、と硬い音は、二人の間に築き上げたトーチカに響いて、テレビの中の歓声から独立した。

「普通の医者に見せたら面倒だ」

白けきった口調が火照った耳朵に触れた途端、フロリーの唇は戦慄きを忘れた、

「ばか！ このばか、ばか！」

飛び出す悪態の中で、自らが認識できたのはこれくらいだった。自分でも何を言っているか理解できないでいる。喉声と息遣いと呻きと金切り声と鼻を嚙る音がごちゃ混ぜになり、目の前が真っ赤に染まった。霞む視界の中冷静と苛立ちの間でじっと身を潜める横顔だけをしっかりと見ようと努力はしてみる。だが眉間に寄った皺以外は、まるで普段と変わらないのだ。それが許せない、どうしても。今まで沸騰しているだけだった激情が吹き零れ、身体の隅々にまで行き渡る。だから固まってしまったかのような指を尻の下に突っ込み、潰れていたクッションを掴んだ瞬間を、彼女ははっきり認識できていない。体重を掛けすぎて硬くなった綿をジャーヘッドに叩き付けた瞬間ばかりが、やたらとスロー掛かっていたのだけ覚えてる。

「何話したのよ、話した？ どうせ」

一発殴れば後はもう手当たり次第で、無茶苦茶に振り回す腕が風を切り、その間にあーあー、という間延びした感嘆詞が挟み込まれる。勿論発信源は彼女ではない。いてえだのファックだの喚きながらもとりあえず数回は殴られてやってから、スリムは慣れた動作で暴れまわる手首を掴んだ。ひゅうつと息を呑んだフロリーが目を閉じるよりも早く、分厚い掌がきつく頬を張る。腕を捻り上げながら

もう一発。

「人様のやることに一々口出しするたあ大した身分になったもんだな、ええ？」

更にもう一発張り飛ばしてから次が来るまでの間に、フロリーはほんのちよっぴりだが瞼を開いた。ぼやける視界の中で、にやにやと笑みを乗せたスリムの唇だけが、くつきりと浮かび上がって見えた気がした。

「俺は俺のやりたいようにするんだ。分かったか？」

乾いた音が二発も続けばもう目を閉じるしかない。泣き声を上げたらそれを叱るようにまた折檻。

「ほら、分かったか！」

「分かったわよ分かった！」

喚き散らせば腫れ上がった左の頬が突っ張った。突放されるままソファに身を投げ出し、フロリーは残っていたクッションに歯を立てた。母親から送ってもらったパッチワークのカバーにじわじわ唾液と唸りが染み入る。掴まれていた手首に滲んだ汗は自らのものか、それとも男の手汗か。どちらにしろ腹立たしいのには変わらないので、目元を擦って無理やり涙と同化させた。

発作的な嘔り泣きは鼓膜の中で跳ね回っているものの、溜息の一つ程度なら聞き取る余裕があった。余韻も何もなくスプリングが軋み、熱が遠ざかっていくのを剥き出しの太腿で知った。

「喚け喚け、ずうっと泣いてろ、くそつたれ」

ワークブーツの厳つい足音が遠ざかっていく。

「次来た時もそれ位しおらしくしてたら、せいぜい可愛がってやるよ」

ドアが乱暴に閉まっても、フロリーは身を丸めるようにしてクッションを噛み続けていた。悔しい。悲しい。妬ましい。原始的な感情は一度火がつけば燃え上がるのは早いが、消えるのも早い。どち

らかのチームが点数を入れたらしく、テレビの中で観客が熱狂し、コメンテーターの口調も早まる。せめて消していつて欲しかったと考えることのみが恨みで、後はもう、燃え尽きるのを待つだけ。涙が止まるのを待つだけ。

一頻り泣いた後、フロリーは鼻水と涙にまみれたクッションからのろのろと顔を上げた。電話。足の裏が床に張り付きながら離れる。鼻を嚙りながらも何とか寝室にたどり着き、受話器を取り上げるこゝとができた。覚えた番号を感覚の鈍い指で押し、コール音がなっている間にベッドの上へ身を投げ出す。今日はもう、このまま寝てしまいたい。頭はそう思っているのに、一旦その気になった身体は温もりを欲しがった。

低くぼそぼそした声が、熱を持った耳たぶを優しく打つ。それだけでもう、心が静まる。気持ちがりセットされ、尖っていた角が丸くなる。ハ―イ、と投げかけた時にはもう、その小さな唇に笑みを浮かべていた。

「ねえ、今暇してんの？ もしそうなら、うん」

普段から少し甲高いのだ。これくらいで丁度いい。そう納得しながら、電話の向こうにいるキルケアへ掠れた声で囁きかけた。

「一緒にシリアルでも食べない？」

t i l l d a w n

その見かけと裏腹に、フロリーは意外と用心深い性格だった。あるとき勤め先のステージで腰を突き出し見事なヴァンプを決めた直後、ねっとりした視線を一糸纏わぬ身体に注がれて全身鳥肌の嵐。男の欲情に慣れた彼女ですらも苛立つ陰湿さ、コートを脱ぎながら甲高く愚痴を零せば、ぐったりとソファに身を投げ出していたキルケアは一瞬だが三面記事から意識を逸らした。

「いやんなる！」

忘れようとしていた怖気が、怒りに混じって嘆きと共に口から零れそうになる。その様を泰然と、あの漆黒の瞳で見つめられると、それだけでフロリーは胸の奥がきゅうつと締め付けられるのを感じた。

だが官能も一瞬だけ。すぐさま新聞を広げなおしたキルケアは、鬱屈を堪えきれずに開けていたクアーズの缶を取り上げた。中の液体からすっかり気が抜けていると知り、ふうつと一つ溜息を漏らす。「あのジャーヘッドに締め上げてもらえば」

すげない言葉に返す嫌味も見つけられず、蘇った二の腕の粟立ちを摩りながらコートをクローゼットへ戻しに行くのがお決まりのパターン。自業自得だとは分かっているのだが、彼女はそれでもあからさまに拗ねた顔で唇を尖らせるのだった。

ドクター・キルケアと呼ばれる男にフロリーが出会ったのは数年前のこと。小汚い診療所で医療行為に勤しむ彼の元へ、生理が止まったという理由で押しかけたのがその始まり。肩書きは外科医だった。だが非常に融通の利くことで知られている。今思えば市販薬でも買って自己分析すればよかったのだが、彼は無知を馬鹿にすることなく、動揺を黙って受け止めてくれた。結果的に診断結果がシロ

だったと判明しても、それは変わらない。不規則な生活故のホルモンバランスの乱れが原因であると解説し、ビタミン剤を処方すると約束した彼の顔を見たとき、フロリーは思わず不安に丸椅子の上で身じろぎしてしまったほどだった。無関心、で表現してしまうことができたならどれほど楽だっただろう。キルケアは乾き過ぎて痛みを感じるほどの視線をぼんやりと患者に注ぎ、それからふわりと微笑んだ。空洞と見まがいそうな闇の不気味さ、まるで自分が道端に捨てられた空き缶にでもなったかのように感じる口角の湾曲。彼女のために笑っているのではないと、瞬時に気付いた。逃げたほうがいいのかもしれないとも。それなのに彼女はその夜自らのベッドに彼を招き入れたし、気付けば部屋に来ることを許している。

確かに、ボーイフレンドとしてキープしておく分には悪い男ではない。痒いところに手の届くような相槌を打ってくれるし、子守唄を歌わせたら天下一品。風邪気味と見ればアスピリン代を含めただで診察してくれた。軍医のキャリアを捨てこんな街で診療所を構えている男に素直さや良識なんて言葉は最初から求めていないので気にならない。そもそも彼に増して偏屈だったり自分の意見押し通すばかりの男など世の中に山といえるのだ。またこれは一番重要なことだが、フロリーは多少の軽蔑を身に浴び羞恥を感じた方が燃える性質であると、自らの性向を正確に把握していたのである。

今日も今日とて相手のときめきを一切考慮に入れず、キルケアは自らのノックに気が済めば後は黙ってその場に佇んでいる。このまま待たせ不機嫌の種が芽吹いても困るので、体裁だけは巨大な尻をパンティに押し込むが違和感は拭えない。全てを無視して、ドアを叩きつけたフロリーはほっそりとした身体に飛び込んでいた。しなやかな腕は、弾む肉体をよろけながらも受け止める。ジャケットに

包まれた上半身が逸らされた瞬間、ぱりぱりと小さな音が二人の間に滑り込む。はっとして、足元に眼をやった。コンビの靴が、玄関先に飾ってあった松ぼっくりを踏み潰している。

「あーあ。もう」

「なに？」

身体を離し、今日初めてまともに見た顔には、興奮の欠片も見当たらなかった。ぽんと脛を蹴飛ばされて、ようやく自らの失策に気付いたらしい。持ち上げられた靴底の下からすばやく攫った木の実を、フロリーは男の鼻先にぶら下げて見せた。白い絵の具が塗られたそれは見事にひしゃげ、かさが好き勝手な方向に広がっている。

「ごめん。気をつけようと思ってただけ」

「ほんとひどいわ、オーナメント」

「もうそんな季節か。つい最近までハロウィンだって騒いでたのに」
「とつくに終わったわよ。もう世界はジングルベル」

ふんふんと鼻歌で奏でて見せれば、それを掻き消すように転がされた苦笑い。女を優しく見下してみせるとき、彼の細面は子犬のように全てが垂れ、なぜか庇護欲を掻き立てた。

「そうやって一年中イベントで浮かれるんだからな」

「せつかく可愛くできたのに」

言っでは見るものの、無念さは全くといって良いほど感じない。

部屋の外に向かって投げつければ、早すぎた聖夜の余興は小便臭い階段の上を数段飛ばしで跳ね、見えなくなった。

「クリスマスツリー買ってよ」

「どんな奴？」

抱えていた袋を手渡し、なおそのまま待っていてくれるので、手早くリビングに追い立てる。彼の自宅を訪れたことはないが、「テインゼル・カウンセル」なんてイエローペーパーをマガジンラックに常備していないことは、ここに来るたびローテーブルから雑誌を取り上げることで察せた。キッチンに引っ込み、フロリーは扇情的なニュースにも負けない声を張り上げた。

「白いプラスチックの奴で、紫のライトがついてるの」

「ちよつとどうかと思うけど、その趣味」

「見たことないからよ」

袋の中から出てきたシリアルは先日買ってきてくれと頼んだもの。真新しい乾燥苺の甘酸っぱい匂いを嗅いで見たくなったが、我慢して封を切らないまま棚に押し込む。

「クリスタがね、去年レスに買ってもらったの。すごくお洒落なんだから」

「そうなんだ」

クラッカーとバドワイザーの缶を持っていこうと冷蔵庫のドアを閉めたところで気付き、慌ててクアーズと取り替える。幸いキルケアの意識は州内にあるペットフード会社の醜聞に向いていた。

「買ってくれる？」

「いいよ」

医者らしい律儀な口調は、ひとまずフロリーを満足させた。彼がその時まで覚えているかどうかは別問題だったが。弟の入院費捻出に頭を悩ませているとはいえ、ともかくキルケアは最低限の金を持っている。少なくとも女から生活費を巻くうえで非常に重要なことだった。殴られたり怒鳴られたりは我慢できても、金を取られては生活ができない。職場から前借ができなくなった途端捨てられたのならまだ良いほうで、ひどいときは部屋の前で待ち伏せされ、消費者金融へ引っ立てていかれたことも幾度かある。財産に手をつけないということは、自由を保障するということだ。キルケアは彼女を縛ろうとしなかった。他の男の前で乳房を晒そうが、訳の分からないものを欲しがろうが、哀れもうとも否定はしない。今までの男に比べれば、神か仏かとは言わないまでも、非常に良い待遇であることは間違いなかった。

彼の隣に腰掛け、持ち込んだクラッカーを齧る。耳元で響く、プルタブを押しのかたがスの音が心地よい。はつきり言って広げられた記事には飽きるほど目を通していたし、キルケアはそれを種にして会話を広げる気など全くないようだったが、この時間をフロリーはとても大切にしていた。セックスは楽しい。だがこうして何をすることもなく二人でいるときに感じるこそばゆさは、ある意味オーガズムを凌駕していた。自分の身体が彼一人だけのものになったような気がする。

体格の割にはがっしりとした肩に頭を預けていたら、ふと極端な消毒薬の匂いが鼻腔を擽る。首筋に鼻先を擦り付けると、キルケアは喉を震わせながら彼女の秀でた額を押し退けた。

「くすぐつたい」

「何これ」

顔に掛かったブルネットを掻きあげ、フロリーはもう一度深く息を吸いこんだ。

「何か手術でもしたの？」

「別に？」

もう一度、今度は額を指で弾かれたりしない前にもっと距離を詰め、フロリーの鈍い頭は何か回転を始めていた。彼が通常の医療行為だけではなく、グレーゾーンすれすれの「善行」に手を出しているのは承前の事実。それらで得られる収入を加えたところで、高い医療費や弁護士の費用を払えるのかはいささか謎だったが。いろいろしてるんじゃない、と曰くありげに睫毛を瞬かせていたクリスタの笑みを思い出す。

「これ」

「手術って言うか、来る前に患部の抜糸をしたくらいだけど」

諦めたのか好きにさせ、そのまま雑誌に目を落とす。

「仕事は上手く行ったのに、逃げるとき門柱を乗り越えようとして

脇腹挟ったんだってさ」

そのまま彼女黙り込んでしまったから、これで話は終わったと思
ったのだろ。だから遠慮の欠片もなく立てられた歯が、長い首筋
に食い込んだとき、予期せぬ痛みに呻いたのだ。喉が震えた拍子に
吹き上がったアルコールは、鼻腔にまで迫ったらしかった。

「何なんだよ一体！」

むせ返る動きに合わせて痙攣する喉仏をくっ付けた頬で感じなが
ら、フロリーは煮えくり返る怒りに身を硬直させていた。

「ひどい」

アラスカもかくやと言った視線に晒されても、ミルクチョコレー
トの色をした瞳は一切怯まなかった。

「あいつを診察したんでしょ」

「だから何」

まだ箆った咳を続けながらも、とりあえず滲んだ目尻を指先で誤
魔化する。

「ふざけるのにも程度ってものが」

「その怪我。抜糸って、あいつの脇腹を」

早口でそれだけ吐き出した唇は、整った前歯に噛み締められて徐
々に赤黒く変わる。とりあえず相手から距離をとることに成功した
キルケアは、ひそめた眉の下から放つ眼光を少しだけ緩めた。

「ああ」

軽蔑の温度は変わらないが、紛れ込んだ不純物のお陰で少しだけ
切先が鈍る。

その機に乗じて、フロリーはまた声を張り上げた。自分でも、煮え
たぎる衝動の原因がさっぱり分からない。論理的思考を放棄した脳
の末端で爆ぜた火花が、視神経を伝って眼球全体に広がる。

「仲悪いんでしょ、どうしてそんな」

「だって患者として来たんだ」

見下ろす瞳に膜が張ったのを見た瞬間、キルケアの声へあつという
間に諦観が紛れ込んだ。

「頭が空っぽでも」

「大したこと」

鼻の奥がかつと燃え上がり、ついで湿り気を帯び始める。幸い鼻水が垂れるよりも早く涙が溢れ出し、顔中をとめどなく濡らし始めたが。

「大した事ない怪我なのに！ 市民病院へ！」

「患者は患者だよ。それに」

汗すら引いた缶の底がローテーブルにぶつかる。こん、と硬い音は、二人の間にぶら下がった面会謝絶の看板にぶつかって、膝の上のゴシップから色を奪った。

「金持つてるしね」

うんざりした口調が火照った耳朵に触れた途端、フロリーの唇は戦慄きを忘れた、

「ばか！ このばか、ばか！」

飛び出す悪態の中で、自らが認識できたのはこれくらいだった。自分でも何を言っているか理解できないでいる。喉声と息遣いと呻きと金切り声と鼻を嚙る音がごちゃ混ぜになり、目の前が真っ赤に染まった。霞む視界の中冷静と苛立ちの間でじつと身を潜める横顔だけをしっかりと見ようと努力はしてみる。だが眉間に寄った皺以外は、まるで普段と変わらないのだ。それが許せない、どうしても。今まで沸騰しているだけだった激情が吹き零れ、身体の間々にまで行き渡る。だから固まってしまったかのような指を尻の下に突っ込み、潰れていたクッションを掴んだ瞬間を、彼女ははつきり認識できていない。体重を掛けすぎて硬くなった綿を撫で付けられた髪に叩き付けた瞬間ばかりが、やたらとスロー掛かっていたのだけを感じている。

「何話したのよ、話した？ どうせ」

一発殴れば後はもう手当たり次第で、無茶苦茶に振り回す腕が風を切り、その間に小さいながらもはつきりと聞こえる舌打ちが挟み込まれる。勿論発信源は彼女ではない。無言で腕を掲げ攻撃をやり

過ぎてから、キルケアは深々と息を吐き出した。再び振り上げられたクッションの合間を縫い、黒い目が腕の下から覗く。

「黙れよ」

喧騒の空白にそう一言放ったきり、再び口を嚙む。フロリーは、自らの腕が瞬時に凍り付いてしまったのを感じた。淡々とした口調で容易く身体を縛り付けると、鮫のように感情の見えない瞳は言葉を一飲みにしてしまった。もっと喚けばいい。部屋は沈黙に包まれている。もっと暴れればいい。肉体の動きを阻むものは指一本ない。そう考える思考すら黒い深淵に吸い込まれる。

キルケアは穏やかに眇めた瞳で彼女を見下ろすと、駄目押しのように口を開いた。

「泣くな。分かったな？」

それは封印であり、同時に呪縛を説く鍵でもあった。

「分かったわよ分かった！」

固まっていた唇はわなわなと震え、瞼が再び熱を持つ。溢れ出る涙を隠すよう身を投げ出し、フロリーは残っていたクッションに歯を立てた。母親から送ってもらったパッチワークのカバーにじわじわ唾液と唸りが染み入る。後頭部に突き刺さる視線の意味は一体何か。何にせよ辛くて、嫌々をするように顔を伏せたまま、左右に強く振った。

発作的な嘔り泣きが鼓膜の中で跳ね回っていなくとも、隣の肉体が立てる音は何一つ聞こえなかっただろう。余韻も何もなくスプリングが軋み、熱が遠ざかっていくのを剥き出しの太腿で知った。

「そうやって泣けば何か変わると思ってるのか？」

コンビの固い足音が遠ざかっていく。

「結構だな。そうなるようせいぜい祈ってるよ」

ドアが静かに閉まって、フロリーは身を丸めるようにしてクッションを噛み続けていた。悔しい。悲しい。妬ましい。原始的な感

情は一度火がつけば燃え上がるのは早い、消えるのも早い。身を擦った際に、取り残された雑誌が涼しい音を立てて床に落ちる。せめてラックに戻して欲しかった考えることのみが恨みで、後はもう、燃え尽きるのを待つだけ。涙が止まるのを待つだけ。

一頻り泣いた後、フロリーは鼻水と涙にまみれたクッションからのろのろと顔を上げた。電話。足の裏が床に張り付きながら離れる。鼻を嚙りながらも何とか寝室にたどり着き、受話器を取り上げるこゝとができた。覚えた番号を感覚の鈍い指で押し、コール音がなっている間にベッドの上へ身を投げ出す。今日はもう、このまま寝てしまいたい。頭はそう思っているのに、一旦その気になった身体は温もりを欲しがった。

面倒くささと不遜さの絶妙に入り交じった声が、熱を持った耳たぶを優しく打つ。それだけでもう、心が静まる。気持ちがりセットされ、尖っていた角が丸くなる。ハイ、と投げかけた時にはもう、その小さな唇に笑みを浮かべていた。

「ねえ、今暇してんの？ もしそうなら、うん」

普段から少し甲高いのだ。これくらいで丁度いい。そう納得しながら、電話の向こうにいるスリムへ掠れた声で囁きかけた。

「一緒にシリアルでも食べない？」

November morning

時計を見るとまだ9時前。意識には留まっていけないが、恐らく何か外の物音でフロリーは目を覚ました。もともと眠りは浅い性質ではあったものの今日はまた特別。店が閉まった後もうつかり騒ぎ過ぎた。ヤニ臭さも安物の香水の匂いもまだ消えない店の中で繰り広げられる、ささやかな狂乱。バーテンダーの青年は磨く前のグラスにどんどんと安物のシャンパンを注ぎ、掃除夫の老人に振舞う。金勘定が趣味な名ばかりの取締役は、甲高い笑い声を上げるウェイトレスに色目を使う。極めつけは支配人パパ・ナイジェル。全ての雌犬の父親、パパ・ナイジェル！ の登場。明け方も近付いているというのにジョークの冴えは健在で、優しげな目つきを一切崩すことのないままブツシュミルズ片手に肩を竦める。

「若いうちに楽しむのは良い事だ。私くらいの年になると、頭とあれへ流れる血液の配分に注意を払わないといけなくなるからな」

自宅にたどり着いたのは5時前で、その後化粧を落として服を脱いだけで気絶するようにベッドへ倒れこんだ。そうでなくてもこここのところ不運ばかり続いているから、この喜びを引き伸ばしたまま出勤まで寝こけるというのが昨日立てたスケジュール。なのにすっかりご破算、シーツの中で伸びをして、欠伸と共に零れる自らの間抜けな欠伸を聞いたら、頭の鈍痛は消えないものの瞼ばかりはすっかり開いてしまった。アルコールは睡眠を阻害するという雑誌の記事はガセでなかったらしい。まだ下着姿のままベッドから抜け出しても、耐えられないほどではない事実が運勢を悪い方向へ後押しする。まだ温もりを残している足裏をひんやりとしたフローリングへおろし、フロリーは肉付きの良い肩を落としたまましばらく座り込んでいた。起きたら何をするべきか。本当は知っている。溜まった洗濯物、髪の毛だらけの床に掃除機をかける。特に不足しているものはないが、買い物に行くのも良いかも知れない。

でも本当のことを言えば、彼女は何一つしたいと思っていなかった。酔いのせいではない身体のだるさが、30とほんの少し活動してきた肉体を蝕んでいる。もう一度掛け布団を捲り上げようかとも思ったが、意識の片隅と足が拒絶して身を引き起こす。とりあえず先ほどの印象は訂正。やはり少し肌寒い。音楽か、それが無理ならせめて暖房の稼働音でも部屋にあればいいのだけれど。ぼんやりと考えながら、鏡台の椅子に引っ掛けてあったTシャツに頭を突っ込む。緑色で州立大学のロゴが入ったそれは、昔の彼氏の部屋から持ってきた代物だった。このゴシック体を見るたび、いい加減鉄で切ったウエスにでもしようかと思うのだが、そこそこ丈夫な布地はなかなかよれてくれないでいる。今のように、結局はどうでも良くなくなってしまう。

燃費の悪い身体が栄養を欲していたが、かといってもたれ気味の胃は固形物など受け付けない。一度腰を下ろしたら朝食を食べ損ねることは明白だったので、ダイニングテーブルに片手を着いてしばらく思案する。勿論、窓際に置いたラジオのスイッチを抜き取り入れてあった。陽気な男の声で、スペイン語をがなりたてている。集中力は乱れるが、実際のところそれほど気を揉むことではない。とりあえず舌と上顎がくっ付きそうだったので牛乳を。冷蔵庫から引きずり出したボトルに唇をつけ一口二口。獣臭い液体が通り過ぎるたびに喉が縮んでは広がり、頭が冷える。思考回路はとりとめもないままだったが、気分の面では少し、ほんの少し。

思い出したのは買ってあったシリアル。胃を刺激せず栄養価は高い。どうして存在を忘れていたのだろうと不思議に思うほど、今の状況に打ってつけ。食器棚の下に屈みこんで中を漁る。もう少し寒ければキャンベルスープでも良かったのだが、鍋に入れて火をかけるそ

の手間と時間が億劫だ。チーズマカロニも同じ理由で却下。最近わりと真面目に食事を作っているのでレトルト食品は豊富に蓄えられていた。これなら買出しにいく必要もないだろう。

まず登場したのは黄色い熊の絵が描かれた可愛い箱。干からびて赤黒く変色した苳が入っている。これをテーブルに投げ出しておく。次いで隣に並んでいた茶色の箱にも手を伸ばした。安物のオートブランである。ついさっき行ったのと同じ手の動きで天板の上を滑らせる。先客にぶつかった箱はお利口なハーフガロンのプラスチックボトルに阻まれ、床へと落下することはなかった。

同じ棚の三段上からボウルを取り出し、ついでにスプーンも。ここまで来てやっと座ることができる。事実フロリーは、大きすぎる尻を落として食器をテーブルに着地させた。

だが材料が揃ったにもかかわらず、彼女はしばらくの間ぼんやりとそれらを見つめるだけだった。目の前にあるものが何に使うのかも知らないといった顔で。身体はだるい。だが眠気は取れたと彼女は思い込んでいた。時計は9時を12分過ぎている。ラジオから垂れ流される言葉は相変わらず意味が分からない。シンクの前に横たわる窓はそこそこ大きいものの、隣の雑居ビルと隣接しているお陰で碌に光も入らない。辛うじて煤けたコンクリートを潜り抜けてくる朝日は細く白く、テーブルの上を数条に渡って舐めるだけで、その下に隠された裸足のつま先を暖めてはくれなかった。反対側の踵で踏みつけて暖を取ってみるものの、破れも目立つ合成樹脂は末端冷え性から容赦なくぬくもりを搾取していった。せめてジーンズを履けばよかったのに。剥き出しの太腿を覆うよう手を被せながら、フロリーは考えていた。昼夜逆転一步手前の生活は、睡眠時間の短さで辛うじて正常範囲を保っている。努力しても肉体は不満を感じているようで、また太ったらしい。身じるぎにあわせて揺れる太腿の贅肉を感じるのが、腹立たしかった。“シリアルはお子様の成長に

必要な栄養素をバランスよく配合した最適な朝食です”。ここでようやく、意識で思うほどには満たされていない腹具合を思い出す。

オートブランを取り上げる。箱の上部を引っ掻くようにしてこじ開ける。三流ブランドの癖に、紙の内側には更に銀色のアルミ袋が見える。引きずり出して、箱の方は小さく引き裂いた。部屋の片隅に鎮座したダストボックスへ投げ込もうとしたが、諦めてテーブルに積み上げる。後でゴミ袋を交換しなければならぬ。収集日は二日後だが、蓋が開きかかっているところを見ると恐らく容量の9・5分目まで内容物が迫っている。

お待ちかね、袋の口を開くと、香ばしい麦の香りが鼻を撫った。砂糖が少ないんじゃないかと思ったが、許容できる範囲。これをボウルの底から三分の一まで注ぐ。

続いて引き寄せた熊の箱を開く。この箱は小さい頃から御馴染みだが数年前キャラクターのデザインが変わった。前はもつと可愛かった。目がくりくりしていて。しょっちゅう力を入れすぎてボール紙を破き過ぎ、セロテープで補修しなければならぬ羽目に陥るの、慎重に箱の隅へ爪を食い込ませる。食い込む。成功。

苺の酸っぱい匂いと、過剰な砂糖、そして少しの香料を顔に浴びる。自然と笑みさえ浮かんでしまう甘ったるさ。こちらも先ほどと同じく、三分の二に収まるよう箱を傾けた。

仕上げに上から牛乳を流し込む。奔流が二層式になっていたフレークの均衡を僅かに崩したが、その程度の乱れを惜しむ暇はない。浮かび上がってきた乾燥苺と麦の固まりを沈めるようスプーンでかき混ぜれば、後は混沌。乱暴な攪拌に、ボウルから牛乳が一滴飛び出して、テーブルの上で広がった。

シリアルはふやける前に食べるというのが彼女の信条だった。スプーンは幅広。彼女の口は平均値に比べそれほど大きいとはいえないが、容易に適応して山盛りのフレークを飲み込んでいく。身を屈め

た拍子に垂れ下がった前髪が、危うく牛乳へ浸りそうになる。汚れたところでどうせ今からシャワーを浴びるので問題ないが、それでもフロリーは律儀に何度も指の先で掻き上げ続けた。時間など手に負えないほどあるのに、忙しいスペイン語に急かされる。否、途中から声は途切れた。引き継いで流れ出したのはセンチメンタルな前奏。

フランク・シナトラの歌声が、狭いキッチンに朗々と響き渡る。世界のクルーナーは、ノイズなどでその価値を落としたりしない。季節はずれの「セプテンバー・ソング」。耳の中へ届くに任せながら、フロリーは無心にスプーンと顎を動かし続けた。奥歯にひびが入りそうなほど強く噛み締めればじわりと染み出す牛乳と、プラスとマイナスが組み合わさって丁度良くなった糖分が混ざる。自らの咀嚼音が音楽を阻害し続け、はつきりと歌詞が聞こえない。September, November. 今年も後一ヶ月と少し。誕生日までは半年。パパ・ナイジェルに相談を。どれだけ頑張っても、40を越えたら身体の線も崩れてくるし、大体そんな年まで無様な思いをしたくない。あと7年と半年以内に手に職を付けなければ。先輩のコールガールは“父親”の手を借りて看護師になり、ウェイトレスをしながら大学に通う健気な恋人と仲良く暮らしている。7年と半年。勝負をかけるならあと数年の内。

嫌なことを思い出してしまった。オートミールはいい加減べたつき始め歯に挟まりそうだ。ボウルが意外と深く、たくさん入ることを知っていたにも関わらず、フロリーは容量の三分の二まで注ぐという暴挙をしでかしてしまった。胃が動き出した途端湧いてきた食欲は、食べるという行為自体を拒んでいるわけではない。それが問題だった。毎晩あれだけ踊っているのに、年を経るにつれカロリーオーバーの状態が続く。舞台女優を夢見ていた頃は、練習が引けた夜の10時にレストランへ繰り出し、2時ごろにしめとしてシユリ

ンブカクテルをたらふく腹に収めても太りはしなかった。あのまま同じペースで食べ続けていたらどうなっていたことか。それでも少したるみ気味の横腹が恐ろしい。ダイエットなどできた例がないので、どこか意味のある日常生活の中で消費しなければならぬ。ポウルを掲げ、掬うのが面倒になった粒たちごと飲み下してしまう。牛乳も良くないらしい。脂質が高い。豆乳に代えれば良いと以前クリスタが助言してくれた。だがどれだけ頑張っても、フロリーはあの独特の臭気に耐えることができなかった。他の案はいくらでもある。思いながら、彼女は今まで一度もそれらを試したことがなかった。

シナトラが幕の向こうへ引き取り、再びスペイン語がやかましく戻ってくる。

立ち上がり、スイッチを切った。ぷつんと途切れた余韻が耳に残っている間に蛇口を捻る。水は冷たく、冬の訪れが秒刻みになったことを知らせていた。再び蛇口を捻る。洗った食器を棚に戻す。

奥歯にこびり付いたオートミールの感触を、思ったより酸っぱかった苺の味が残る舌で撫でる。いくら強く擦ったところで、どちらも剥がれてはくれなかった。もどかしい。

ここにはいない男達に会いたいと思った。どちらでもいい。身体中に栄養が行き渡ったはずなのに、まだ食べることができそうな気がした。フレンチトーストを食べながら砂糖の少なさに文句を言ったり、食の細さを笑いながら煽るようにテイクアウトの中華料理を掻き込んだり。

けれどももう、これ以上食べてはいけぬ。昼食までは。それまでの時間をどうやって過ごすかが今日最大の課題。とりあえずシャツ

を脱ぐ。ショーツを下ろす。

服を手にしたまま、じっと考える。だがどれだけ知恵を絞ったところで、何も思い浮かばないのは明白だった。考えてするようなことではないのだ。

とりあえず汗臭い身体と髪を洗おうと、フロリーは股の付け根を掻きながらバスルームに向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2060y/>

Twinkle, Tremble, Tinseltown

2011年11月24日08時47分発行